松江市文化財調査報告書 第137集

市道大石清水線道路新設事業に伴う発掘調査報告書

上講武清水遺跡・上講武大石遺跡

平成23(2011)年3月

松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第137集

市道大石清水線道路新設事業に伴う発掘調査報告書

上講武清水遺跡・上講武大石遺跡

平成23(2011)年3月

松江市教育委員会
財団法人　松江市教育文化振興事業団

例　　言

1．本書は平成21・22年度に財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した市道大石清水線道路新設事業に伴う上講武清水遺跡・上講武大石遺跡発掘調査報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は松江市から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。

3．本調査の所在地は、以下の通りである。

上講武清水遺跡　松江市鹿島町上講武840-2

上講武大石遺跡　松江市鹿島町上講武396、538-2・3、539-2・3、540-2、543-2、2396-3・5

4．現地調査期間

上講武清水遺跡　平成21年10月27日～平成22年１月19日

上講武大石遺跡　平成22年４月13日～平成22年７月27日

5．開発面積及び調査面積

開発面積　15,730㎡

上講武清水遺跡　158㎡

上講武大石遺跡　539㎡

6．調査組織

依　頼　者　松江市土木課

主　体　者　松江市教育委員会

【平成21年度　上講武清水遺跡発掘調査】

事　務　局	松江市教育委員会		教育長	福島　律子
	〃	文化財課	課長	吉岡　弘行
	〃	〃　調査係	係長	飯塚　康行
	〃	〃　〃	主幹	赤澤　秀則
	〃	〃　〃	主任	後藤　哲男（事務担当者）
調査指導	島根県教育委員会	文化財課	企画員	池淵　俊一
実　施　者	財団法人松江市教育文化振興事業団		理事長	松浦　正敬
	〃	埋蔵文化財課	課長	廣江　眞二
	〃	〃	課長補佐	錦織　慶樹
	〃	〃　調査係	主幹	中尾　秀信
	〃	〃　〃	主任	門脇　誠也（事務担当者）
	〃	〃　〃	調査員	廣濱　貴子（調査担当者）
	〃	〃　〃	調査補助員	三代　正裕

【平成22年度　上講武大石遺跡発掘調査】

事務局	松江市教育委員会			教育長	福島　律子
	〃	文化財課		課長	錦織　慶樹
	〃	〃	調査係	係長	赤澤　秀則
	〃	〃	〃	主幹	昌子　寛光
	〃	〃	〃	主任	後藤　哲男（事務担当者）
調査指導	島根県教育委員会	文化財課		企画員	池淵　俊一
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団			理事長	松浦　正敬
	〃	埋蔵文化財課		課長	大西　誠
	〃	〃	調査係	係長	中尾　秀信
	〃	〃	〃	専門企画員	門脇　誠也（事務担当者）
	〃	〃	〃	調査員	廣濱　貴子（調査担当者）
	〃	〃	〃	調査補助員	福光　龍治

7．報告書の作成にあたっては以下の方に有益なご指導、ご教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

佐藤　信、内田　律雄、平石　充、伊藤　徹広、稲田　陽介

8．本書に記載した遺物の実測、浄書、遺構の浄書は以下のものが行った。

（実　測）　三代　正裕　　福光　龍治　　飯野　正子　　廣濱　貴子

（浄　書）　福光　龍治　　飯野　正子　　小原　明美

9．本書に掲載した現場写真、遺物写真は廣濱貴子が撮影した。

10．本書の執筆・編集は松江市教育委員会文化財課の協力を得て、廣濱貴子が行った。

11．本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海抜標高を示す。

12．本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。

SB…掘立柱建物跡　SK…土坑　NR…自然流路

SD…溝状遺構（ただし、SBを構成するものについては単に溝とした。）　P…柱穴

13．挿図番号は通し番号とし、挿図、図版における遺物番号は遺跡ごとに記載した。

14．出土遺物、実測図及び写真等は松江市教育委員会で保管している。

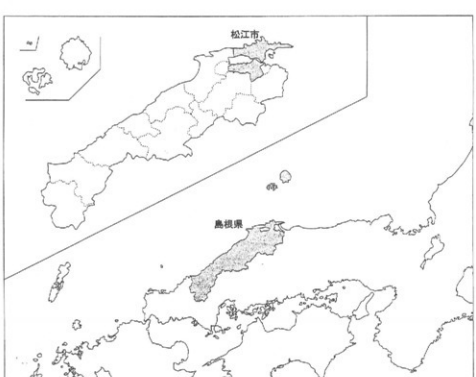
目　次

第1章　調査に至る経緯 …… 1

第2章　位置と環境 …… 3

第3章　上講武清水遺跡
　第1節　調査の経過と概要 …… 6
　第2節　土層堆積状況 …… 6
　第3節　調査の成果 …… 9
　第4節　小結 …… 16

第4章　上講武大石遺跡
　第1節　調査の経過と概要 …… 19
　第2節　土層堆積状況 …… 19
　第3節　調査の成果 …… 23
　第4節　小結 …… 39



第1図　島根県・松江市位置図

挿 図 目 次

第１図　島根県・松江市位置図
第２図　開発範囲と調査位置図 …… 1
第３図　開発範囲と調査範囲図 …… 2
第４図　周囲の遺跡分布図 …… 5
第５図　上講武清水遺跡調査前地形測量図 …… 6
第６図　上講武清水遺跡調査成果図 …… 7
第７図　土層断面図 …… 8
第８図　SK01実測図 …… 9
第９図　SK01出土遺物 …… 9
第10図　SK02実測図 …… 10
第11図　SK02出土遺物 …… 10
第12図　SK03実測図 …… 10
第13図　SB01実測図 …… 11
第14図　SB01出土遺物 …… 11
第15図　SD01・SD02実測図 …… 11
第16図　SD02出土遺物 …… 11
第17図　柱穴内出土遺物 …… 12
第18図　遺構外出土遺物（1） …… 13
第19図　遺構外出土遺物（2） …… 14
第20図　遺構外出土遺物（3） …… 15
第21図　上講武大石遺跡調査前地形測量図 …… 20
第22図　上講武大石遺跡調査成果図 …… 21
第23図　土層断面図 …… 22
第24図　SB01・SB02実測図 …… 24
第25図　SB01実測図 …… 24
第26図　SB02実測図 …… 24
第27図　SB02覆土出土遺物 …… 25
第28図　SB03実測図 …… 25
第29図　SB04～08実測図 …… 26
第30図　SB04実測図 …… 26
第31図　SB05・SB06覆土出土遺物 …… 27
第32図　SB05実測図 …… 27
第33図　SB05出土遺物 …… 27
第34図　SB06実測図 …… 28
第35図　SB06出土遺物 …… 28
第36図　SB07実測図 …… 28
第37図　SB07出土遺物 …… 28
第38図　SB08出土遺物 …… 29
第39図　SB08実測図 …… 29
第40図　SB09・SB10実測図 …… 30
第41図　SB09実測図 …… 30
第42図　SB09出土遺物 …… 30
第43図　SB10実測図 …… 30
第44図　SB10出土遺物 …… 30
第45図　SK01実測図 …… 31
第46図　SK02実測図 …… 31
第47図　SK03・SK04実測図 …… 31
第48図　SK03出土遺物 …… 31
第49図　SK05実測図 …… 32
第50図　SK05出土遺物 …… 32
第51図　SK06・SK07実測図 …… 33
第52図　SK07出土遺物 …… 33
第53図　SK08実測図 …… 33
第54図　SK08出土遺物 …… 34
第55図　SD03・SD04実測図 …… 34
第56図　SD04出土遺物 …… 34
第57図　NR01・02・03実測図 …… 35
第58図　NR01出土遺物 …… 36
第59図　NR02出土遺物 …… 36
第60図　NR03出土遺物 …… 37
第61図　遺構外出土遺物 …… 38

図 版 目 次

図版1　上講武清水遺跡調査前全景（東から）
上講武清水遺跡調査後全景（西から）
図版2　東壁土層断面（北西から）
南壁土層断面（北東から）
図版3　SK01・SK02・SK03完掘状況（西から）
SK01完掘状況（西から）
SK02完掘状況（西から）
図版4　SK03完掘状況（南から）
SB01完掘状況（南西から）
SD01・SD02、調査区東側ピット完掘状況（南東から）
図版5　第28層遺物出土状況
第28層遺物出土状況
第30層遺物出土状況
図版6　SK01出土遺物
SK02出土遺物
SB01出土遺物
SD02出土遺物
柱穴内出土遺物
遺構外出土遺物
図版7　遺構外出土遺物
図版8　遺構外出土遺物
図版9　上講武大石遺跡調査前全景（北東から）
上講武大石遺跡調査後全景（北東から）
図版10　SB01・SB02全景（東から）
SB03～08全景（北東から）
図版11　SB09・SB10全景（北東から）
SD01・SD02、SK01完掘状況（東から）
SK02完掘状況（東から）
図版12　SK03・SK04完掘状況（南東から）
SK05完掘状況（東から）
SK06・SK07完掘状況（東から）
図版13　SK08石、礫出土状況（南西から）
SK08完掘状況（南東から）
SD03・SD04完掘状況（南西から）
図版14　NR01・02・03土層断面（南西から）
NR03完掘状況（東から）
NR03遺物出土状況
図版15　SB02覆土出土遺物
SB05・SB06覆土出土遺物
SB05出土遺物
SB06出土遺物
SB07出土遺物
図版16　SB08出土遺物
SB09出土遺物
SB10出土遺物
SK03出土遺物
SK05出土遺物
SK07出土遺物
SK08出土遺物
SD04出土遺物
図版17　NR01出土遺物
NR02 出土遺物
図版18　NR02 出土遺物
NR03出土遺物
図版19　遺構外出土遺物
T－3第13層出土遺物

第１章　調査に至る経緯

松江市鹿島町上講武の大石地区、清水地区には生活道路としてそれぞれ市道はあるが、両地区とも谷間に営まれている集落であり、奥部では行き止まりの袋小路となり迂回する道路がない。このことから松江市土木課は、災害時や緊急時の路線確保と住民生活の利便性向上のため、集落間を繋ぐ道路として市道大石清水線道路新設事業を計画した。

平成19年８月６日分布調査依頼書が提出され、これを受けた松江市教育委員会文化財課は現地踏査を行ない、９月11日付で開発区域内に周知の遺跡は存在しないものの、遺跡が存在する可能性があり試掘調査が必要な場所が10箇所あることを回答した。

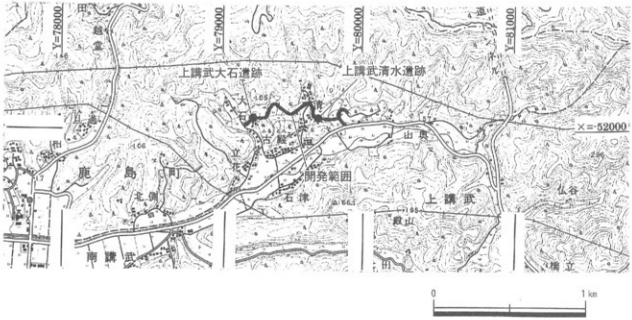
平成21年６月、松江市によって用地買収が完了した２地点で試掘調査を開始することとなり、手掘りによる調査を実施した。この結果１箇所から須恵器、土師器を包含する層を確認し、遺構としても柱穴が認められ、上講武清水遺跡と命名した。計画変更は困難であるとのことから平成21年８月３日、松江市長から文化財保護法上の手続きが行なわれ、島根県教育委員会から工事着手前に発掘調査を実施する旨の勧告が出された。

同年10月、発掘調査を開始することとなり、財団法人松江市教育文化振興事業団において実施し、翌平成22年１月中旬までの期間を要し調査を完了した。

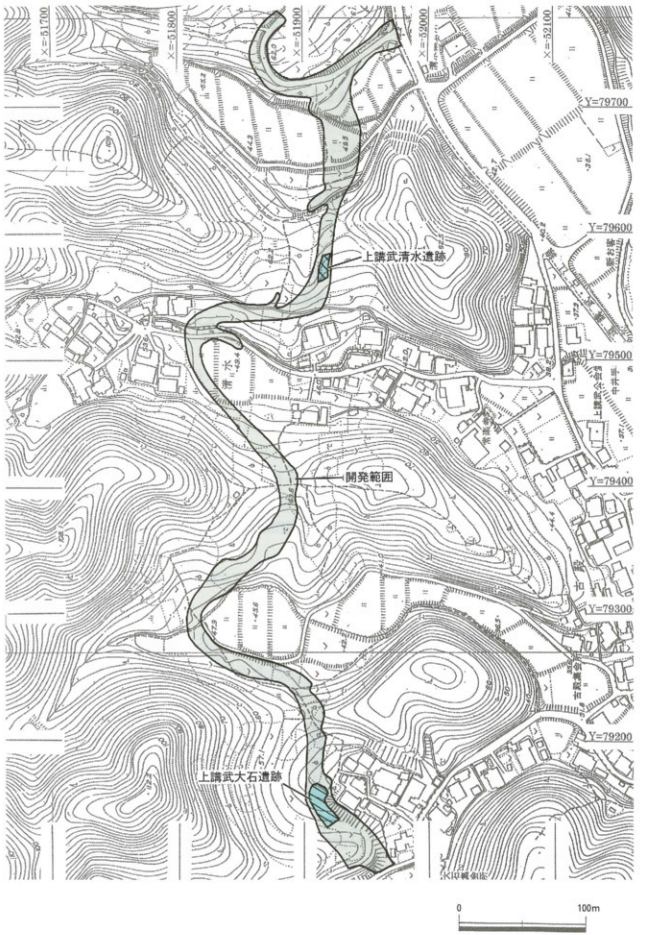
一方、同じく10月末から11月中旬にかけて、残る８箇所の内７箇所について試掘調査を実施し、結果１箇所から須恵器片、土師器片が出土し、遺構としてもピットの他、東端の上層断面で遺構の可能性がある落ち込みが確認され、上講武大石遺跡と命名した。平成22年１月７日、文化財保護法上の手続きが行なわれ、島根県教育委員会から工事着手前に発掘調査を実施する旨の勧告が出された。

上講武大石遺跡の発掘調査は平成22年４月上旬から財団法人松江市教育文化振興事業団において開始し、７月末までの４ヶ月間を費やし完了した。

なお、このことにより市道大石清水線道路新設事業に係わる文化財保護法上の業務は試掘調査を必要とする計画地１箇所を残すのみとなった。



第２図　開発範囲と調査位置図（Ｓ＝１：25,000）



第３図　第３図　開発範囲と調査範囲図（S＝１：3,000）

第2章　位置と環境

松江市鹿島町は島根半島の中央部やや東寄りのところにある。鹿島町の西側には講武盆地があり、その内側に講武川が流れる。講武川は北東から南西に向かって流れ、その周辺には講武平野が形成され180haの水田地帯となっている。講武平野の北東側、谷平野に面した北側丘陵斜面に上講武清水遺跡・上講武大石遺跡は所在する。上講武大石遺跡の北東側、谷をひとつ隔てた所に上講武清水遺跡がある。

縄文時代　前期の遺跡としては佐太講武貝塚（31）が知られている。講武盆地の西側にあり、1933年に国指定遺跡となっている。貝塚を構成する貝はほとんどが汽水性のヤマトシジミで、鹹水性のものはわずかであり、他に骨角器や石製品が多く出土している。他に堀部第1遺跡（16）や北講武氏元遺跡（22）から縄文時代後期や晩期の突帯文土器が多く出土し、講武盆地北側周辺に縄文時代の遺構の存在を窺わせた。平成19年から21年にかけておこなわれた佐太前遺跡発掘調査（29）では、縄文時代中期の土器が出土している。

弥生時代　堀部第1遺跡から弥生時代前期の墳墓が57基検出された。これらの墓の上には標石があり、遠賀川系土器のみを供献している。墓域は“長者の墓”と呼ばれる円丘裾部に存在し、墳墓はそこを中心にして円を描くように列状に配置されていた。遠賀川系土器は、他に北講武氏元遺跡から縄文時代晩期の突帯文土器と一緒に出土している。縄文時代から弥生時代の過渡的様相を知ることができる遺跡である。佐太前遺跡からは前期の大溝や土器溜まりが検出され、多くの土器が出土している。他に墳丘の斜面に伴う石列が検出され、四隅突出型墳丘墓の可能性が示唆される南講武小廻遺跡（24）、弥生時代終末から古墳時代にかけて営まれた墳墓が10基検出され、近畿系や吉備系、朝鮮半島系の土器が出土した南講武草田遺跡（23）、住居跡が検出された大勝間山城跡（33）がある。

鹿島町の西側、佐陀川の南側丘陵裾部には稗田遺跡（39）がある。弥生時代終末から古墳時代前期の鋤や鍬、扉材、準構造船材の一部など多くの木製品が出土し、周辺に大規模な集落の存在を窺わせた。稗田遺跡の南西側丘陵谷筋の斜面には志谷奥遺跡（38）があり、銅鐸2個、銅剣6本が出土している。埋納壙が検出され、周辺で祭祀がおこなわれていたと考えられた。

古墳時代　講武盆地の丘陵には多くの遺跡が存在する。講武盆地の南側丘陵には、全部で68基の古墳が確認された奥才古墳群（27）がある。そのうちの40基が調査され、主体部が礫敷きの箱式木管で、長辺が4mを超え、主室と副室をもつ「奥才型木棺」が検出された。内行花文鏡や素環頭大刀、碧玉製石鋤など多くの遺物が出土し、この地域における高い階層者の墓であったと考えられた。古墳時代前期から後期にかけて長い間築造が続いた群集墳である。他に、前期古墳としては未調査ではあるが、柄鏡型の前方後円墳を含む鵜灘山古墳群（30）がある。岩鼻古墳群（14）からは一辺10m前後の小墳が19基確認され、中期頃の古墳と考えられている。

後期になると古墳や多くの横穴墓が多く造られるようになる。石棺式石室を有し、近くから勾玉が出土した講武岩屋古墳（21）、子持壺が出土した向山古墳（22）などがある。岩屋古墳の近くには恵谷横穴群（13）があり、発掘調査はおこなわれていないが、整正家形の玄室が確認されている。今回の調査区の北西側には寺の奥横穴群（4）が存在する。清水支群7穴、長谷支群16穴、計23穴の横穴墓群で妻入り家形やドーム形の玄室が確認されているが、出土遺物はなく明確な時期は不明である。この横穴墓の丘陵尾根上には寺ノ奥古墳群（3）があり、方墳2基が隣接する。鹿島町と西生馬町と

の境にある高田尾峠で発見、調査がおこなわれた高田尾横穴墓（26）からは、金銅製の圭頭大刀や人骨が出土している。

歴史時代　北講武氏元遺跡から平安時代の遺物が少量出土し、佐太前遺跡からは中世から近世の土器や古銭、瓦が出土している。講武川流域条里制遺跡（25）では、10世紀頃、講武盆地で条里制が敷かれたとされ、明治22年調整の字現地図及び現地の景況から察知される当地区条里制遺構の範囲図には条里制地域に普通みられる三ノ坪、八ヶ坪、丁ヶ坪などの坪名が残っている。

鹿島町内には戦国時代、尼子と毛利に関係する山城が多く存在する。今回調査をおこなった両遺跡の北側丘陵に大石山城跡（6）が、講武平野を挟んだ反対側丘陵の最高所に上講武殿山城跡（7）がある。他にも大勝間山城跡（33）や海老山城跡（28）があり、少し離れた南東側丘陵には古川元春によって築かれた真山城跡がある。講武丘陵の山城は日本海側から講武の谷筋をあがり、真山城を攻めようとする敵兵を防御するためのものであったと推測される(注1)。池平山城跡（36）の主郭標高は約65mを測る。日本海を眺望でき、監視する為の山城であったと考えられる。

江戸時代には松江藩士清原太兵衛によって佐陀川が開削された。これによって宍道湖縁辺地域の水害は緩和され、水田開発が進み、海上交通が発達することによって、経済も発展したと考えられた。佐太講武貝塚や大勝間山城跡の発掘調査において、開削時の掘土が確認されている。

【参考文献】
松江市『新編　鹿島町誌』　2007年
鹿島町教育委員会『佐太講武貝塚発掘調査報告書２』　1994年
鹿島町教育委員会「南講武小廻遺跡」　『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書１』　1986年
鹿島町教育委員会『遍部第１遺跡』　2005年
鹿島町教育委員会『奥才古墳群』　1985年
島根県松江市教育委員会『高田尾横穴墓』　2009年
鹿島町教育委員会「南講武草田遺跡」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５』　1992年
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団　『大勝間山城跡発掘調査報告書』　2009年
島根大学考古学研究会『若田考古』第15号　1979年
中国電力株式会社・島根県教育委員会
「岩屋古墳群」「上講武殿山城跡」『島根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』　2008年

【註】
註1　松江市教育委員会　文化財課史料編纂係　専門官　山根正明氏のご教示による。

第４図　周囲の遺跡分布図（Ｓ＝１：30,000）

第３章　上講武清水遺跡

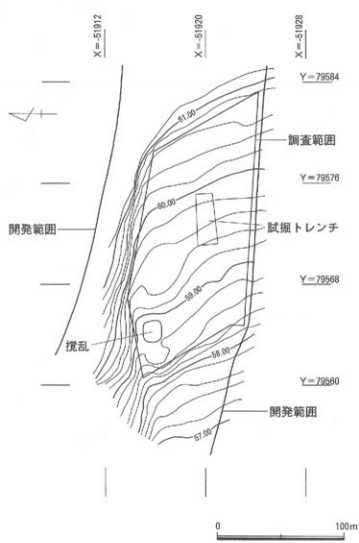
第１節　調査の経過と概要（第５、６図）

上講武清水遺跡は北から南に向かって延びる丘陵の西側斜面に位置する。調査区北側は小高い丘陵、南側は10m程の柿畑を隔てて丘陵へと続き、やや谷地形を呈したところに存在する。

試掘調査において今回の調査区と同じ斜面に４箇所のトレンチを設定し、調査をおこなった。本調査区内の試掘トレンチから柱穴が検出され、奈良時代頃の遺物が出土した。他３箇所のトレンチからは明確な遺構や遺物は確認されなかったため、遺構の存在が考えられた範囲で調査範囲を設定した。東西18.5m、南北9.5mの平行四辺形状の調査区で、標高58.3～61.3mを測り、東から西に向かって傾斜している。

最初に調査区東側と南側にトレンチを掘り、土層観察をしながら調査を進めていった。調査区は以前柿畑や茶畑であったところで、0.1m程の表土を取り除くと籾殻や藁を含む撹乱土坑や植栽痕がみられた。土層観察の結果、調査区南東側で遺構面が２面あると考えられたが、上面での精査を繰り返しても明瞭な遺構は検出できず、下面での遺構検出を行った。上面から下面までの調査途中で、土層断面では確認できなかったが、調査区南西側で堆積土を基盤とする３基の土坑を検出した。この土坑と、調査区南東側の上面遺構との関係は、調査区中央付近で撹乱土坑によって東西の土層が途切れていたため、わからなかった。南東側にも遺構面があるが、３基の土坑の検出面を第１遺構面、下面の遺構面を第２遺構面として記載する。調査の結果、第２遺構面からは、掘立柱建物跡１棟、溝状遺構２条、ピット群を検出した。

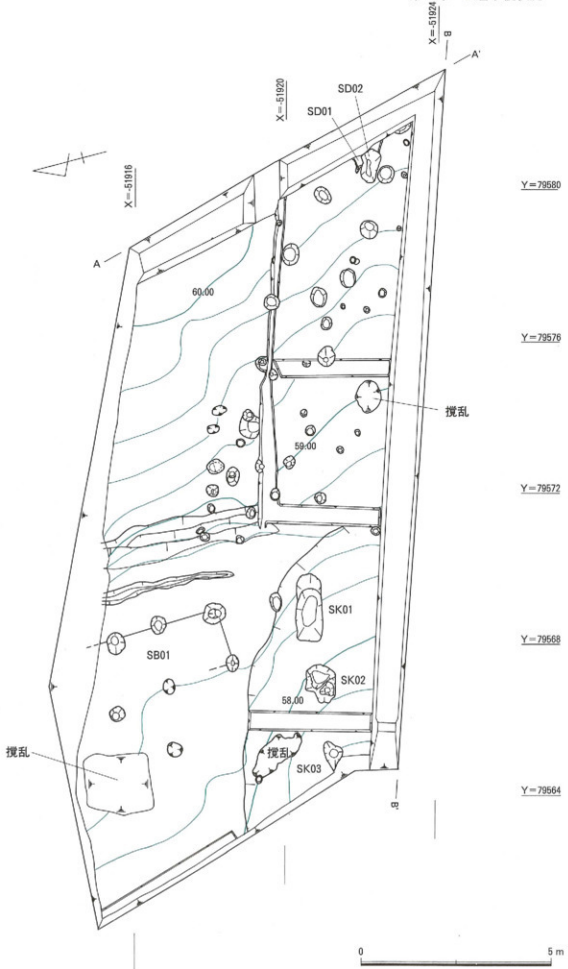
調査区周辺も斜面であり、また斜面下には清水の集落があることから、排土処理や排土置き場には注意をはらい、調査終了後すぐに埋め戻しをおこなった。



第５図　上講武清水遺跡調査前地形測量図（S＝1：300）

第２節　土層堆積状況（第７図）

本調査区の地山は橙色粘質土（第38層）で、東壁土層断面から北東から南西側に向かって傾斜していると考えられた。調査区の一番低い場所、南西端で地山の検出をおこなったが、約２m余り掘削しても確認できなかった。調査区南西側では褐色から黒褐色の土層が厚く、堆積していることがわ



第６図　上講武清水遺跡調査成果図（Ｓ＝1：100）

第７図　土層断面図（S＝1：100）

かった。

第１～４層（表土～褐色土）から陶磁器の他に須恵器片、土師器片、ガラス、ナイロンなどが、第４～７層からは在地系の擂鉢、須恵器、土師器片などが出土し近代以降の堆積土である。第23、24層（灰黄褐色土・にぶい暗黄褐色土）は、調査区南東側で上面の遺構面と考えられた基盤層、第10層（褐色土）はその覆土である。これらの土層からは須恵器、土師器、石製品が出土している。25～30層は調査区南西側の堆積土層で古墳時代から奈良・平安頃までの遺物が多く出土している。後述する３基の土坑は第28層（浅黄橙色土）を基盤層としていた。第２遺構面は第35層（黒褐色土）を基盤とする遺構面である。この土層からは須恵器片、土師器片、石製品が数点出土した。これらの遺物は基盤層の上面から出土し、基盤層の凹面に入り込んだ、もしくは何らかの事情ではまり込んだ遺物と考えられた。第36層以下の土層から遺物は出土していない。

第３節　調査の成果

１．第１遺構面

（１）素堀の土坑（第８～12図）

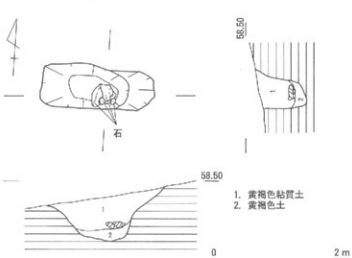
調査区南西側で検出した３基の土坑で、第28層上面から掘り込まれていた。３基の土坑は東からSK01、02、03とした。これらの土坑の形は様々であるが、一直線に並び、土坑底面から河原石が出土している。石と石との間隔は約2.0mを測り、石が据えられた標高もほぼ同じであることから礎盤石と思われ、礎盤石を伴う掘立柱建物が建っていた可能性も考えられた。土坑内からは８世紀中頃以降の須恵器が少量出土し、それ以降の建物跡と推測された。

①　SK01（第８、９図）

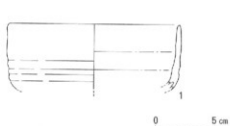
南北0.7m、東西1.78m、深さ0.85mを測り、長楕円形を呈する土坑である。土坑の東側、底面から0.2mのところから河原石が４個検出された。遺物は、８世紀中頃以降の坏片が出土している。(図1)

②　SK02（第10、11図）

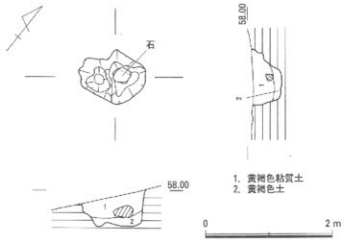
南北0.8m、東西1.0m、深さ0.55mを測る不整形な土坑である。土坑内から石が１個と須恵器の蓋片が出土している。蓋片は口縁端部が短く下垂するもので、７世紀末から８世紀前葉のものである。



第８図　SK01実測図（S＝1：60）



第９図　SK01出土遺物（S＝1：3）



第10図　SK02実測図（S＝1：60）

第11図　SK02出土遺物（S＝1：3）

③ SK03（第12図）

調査区の西端で検出した。全体を検出することはできなかったが、現状で東西0.55m、南北0.47m、深さ0.35mを測る不整形な土坑である。石が１個出土しただけで遺物は出土していない。

第12図　SK03実測図
（S＝1：60）

２．第２遺構面

（１）SB01（第13、14図）

調査区北西側で検出した桁行２間以上、梁間１間の建物跡で、現状で桁行2.8m、梁行1.35m、床面標高58.4～58.5mを測る。建物の南側は後世の土砂の流失によって失われ、北側は調査区外へと続いている。西向き斜面を加工して造られ、加工段下から幅0.15～0.3m、深さ２～５cmの浅い溝を検出した。検出した柱穴は４穴で、径0.45～0.65m、深さ0.15～0.35m程の浅いものである。建物の長軸方向はN－15°－Wを示す。

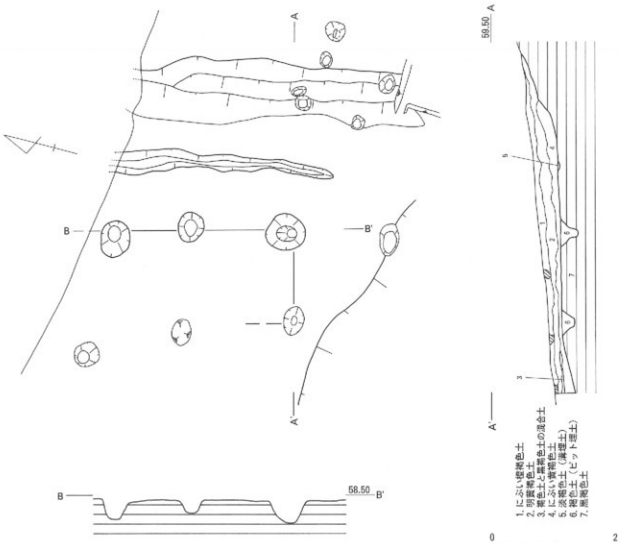
土層断面第２層（明黄褐色土）は東壁土層断面第８層と同層である。第１、２層は須恵器、土師器の他に陶磁器が出土し近世以降の堆積土、第３、４層は輪状つまみの蓋や、高坏、土師器片が出土し古代の堆積土であり、古代の堆積土が近世以降に削平されたと考えられた。

第14図は床面から出土した須恵器である。１は口縁の内側にかえりのある蓋、２は回転糸切痕の底部である。ピット内からは須恵器の小片のみで、時期がわかるものは出土していない。出土遺物から７世紀末から８世紀初め頃の掘立柱建物跡と考えられた。

（２）SD01・02（第15、16図）

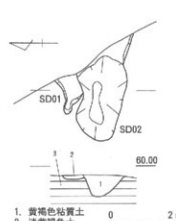
調査区南東端で検出した溝状遺構である。土層断面からSD01が埋没後、SD02が掘られたと考えられた。SD01の規模は現状で長さ0.4m、幅0.2m、深さ0.04mを測り、不整形な浅い溝である。須恵器の細片が出土している。

SD02の規模は現状で長さ0.9m、最大幅0.5m、深さ0.17mの不整形な溝で、西端では円形状に深く、東側ではやや浅くなっていた。

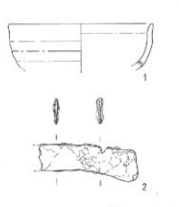


第13図　SB01実測図（S＝1：60）

第14図　SB01出土遺物（S＝1：3）



第15図　SD01・SD02実測図（S＝1：60）



第16図　SD02出土遺物（S＝1：3）

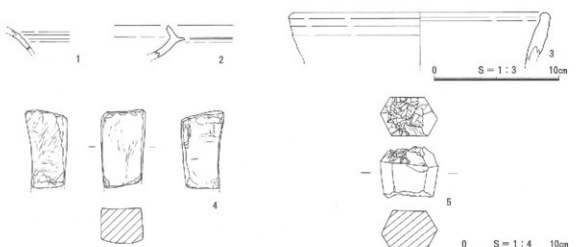
第16図はSD02出土遺物である。１は内湾し口縁端部がわずかに外側に折れる須恵器の坏で、８世紀中葉から後半頃のものである。２は残存長7.7㎝、最大幅2.6㎝、最大厚0.4㎝を測る鉄製品である。やや内湾し、棟と刃があることから鎌の可能性が高い。

出土遺物からSD02は７世紀末から８世紀前半以降、SD01はそれ以前の遺構と推測される。

（３）柱穴群（第６、17図）

調査区内から多くの柱穴を検出した。柱穴は南東側で多く検出され、何らかの建物が建っていたことは確かであろう。柱穴内からは須恵器片や土師器片が多く出土しているが、図化できるものは少なかった。

第17図は柱穴内出土遺物である。１、２は須恵器で、１は蓋坏、２は坏身、３は土師器の甕の口縁である。３の口縁外面にはススが付着していた。４は角柱状の砥石で３面に使用痕がみられる。５は水晶の原石である。調査区内から他に玉作りに関係する石や未製品は出土していないが、周辺に玉作り関係の遺構の存在も窺われた。

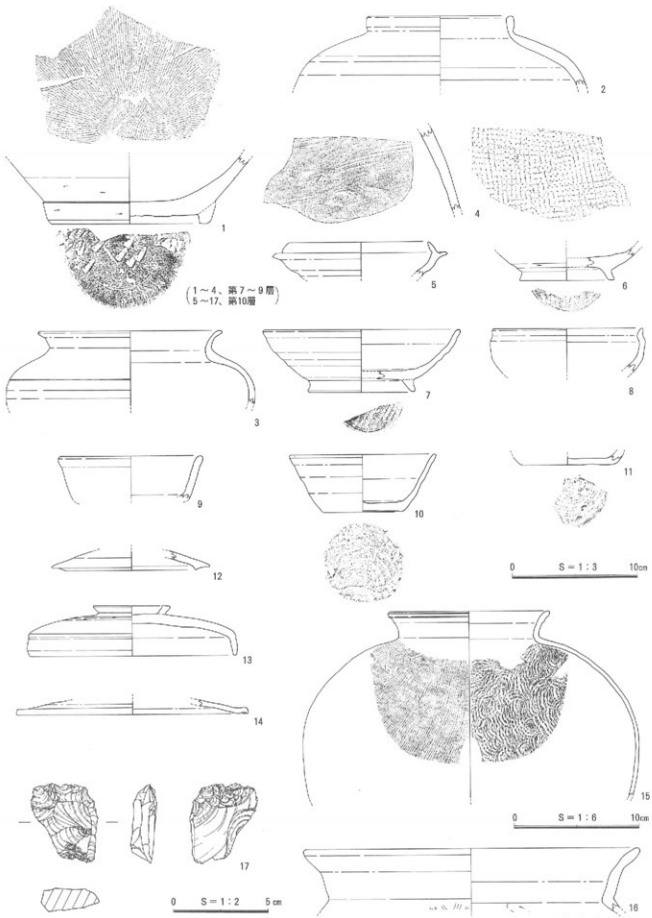


第17図　柱穴内出土遺物

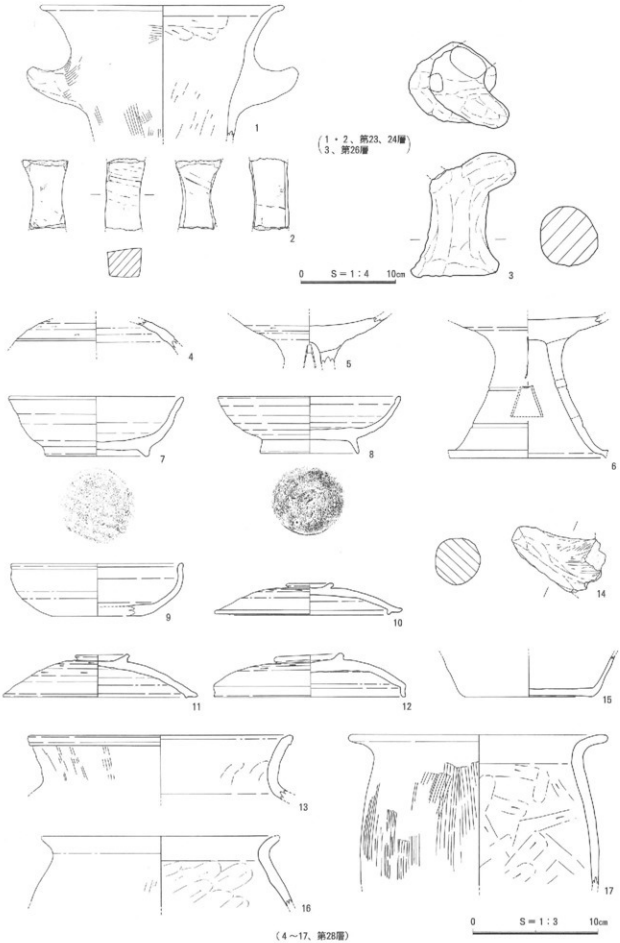
３．遺構外出土遺物（第18～20図）

第18図－１～４は第７～９層の出土遺物である。１は陶器の擂鉢、２・３は須恵器の壺である。２は短頸壺で胴部が大きく張り出すものである。４は亀山焼系統の甕片で、外面に格子状の叩き目、内面にナデを施す。

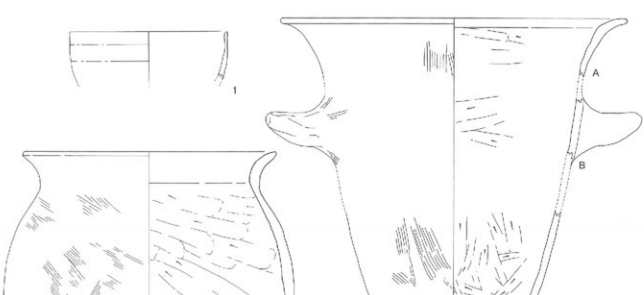
５～17は第10層出土遺物で、５～15は須恵器、16は土師器、17は石製品である。５は口径11.1㎝を測る坏身で、古墳時代終末頃のものと思われる。６、７は高台付坏である。７は高台が低くハの字状で、体部が開く７世紀中葉から８世紀前葉頃のものである。８～10は無高台の坏である。８は口縁端部が外側に折れるものである。10は口径11.6㎝、底径6.4㎝、器高4.6㎝を測り、暗褐色を呈し、焼きがあまいようにみえる。口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がり、底部は回転糸切り後未調整である。９世紀末から10世紀初め頃のものと思われる。古曽志平廻田遺跡や長峯遺跡、神田遺跡出土の杯と酷似しており、11は皿、12～14は蓋である。12は口縁部にかえりをもつもので７世紀中葉から末のものである。13は口径16.4㎝、器高4.0㎝を測り、天井に輪状つまみが付き、口縁部が下垂するもので７世紀末から８世紀前葉のものである。通常の蓋に比べると大きく、坏以外の蓋と思われる。14は



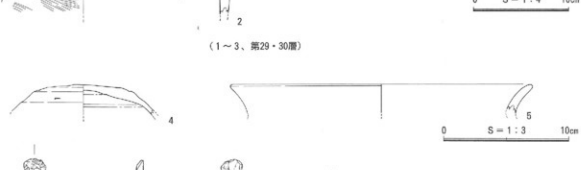
第18図　遺構外出土遺物(1)



第19図　遺構外出土遺物(2)



（1～3、第29・30層）



（4～7、第35層）

第20図　遺構外出土遺物(3)

口縁端部が平坦でわずかに屈曲するもので、8世紀末から9世紀前半に位置づけられる。15は須恵器の甕、16は土師器の甕である。17は黒曜石の楔形石器と思われ、上下の面に打痕がみられる。

第19図-1・2は第23、24層から出土した遺物である。1は口径25.4cmを測る土師器の甕、2は砥石で四面全ての面を使用している。3は26層（橙色粘質土）から出土した土製支脚である。4～17は第28層（浅黄橙色土）から出土した遺物で、4～13は須恵器、14～17は土師器である。4は坏蓋で天井部にヘラ削りが施されている。5・6は高坏である。6は2段2方向に透かしがあり、上段の透かしは切れ目状、下段は台形状を呈し、台形状透かしの上と下に沈線を施す。7世紀代のものである。7、8は高台付坏、9は無高台の坏、10～12は蓋である。10・11は輪状つまみで口縁の内側にかえりをもつ7世紀後半のもの、12は口縁端部が屈曲するもので、7世紀末から8世紀前葉のものである。13は口径20.6cmを測る甕で、外面にわずかにハケ目がみられる。14は把手、15は底径10.0cmの土師器の坏で全体が風化しているため調整などは不明である。16・17は甕で8～9世紀代と思われる。

第20図-1～3は第29、30層の出土遺物である。1は須恵器の坏、2は土師器の甕、3は口径35.8cm、

器高31.7cmを測る甕である。３のＡは頸部から口縁部、Ｂは把手部、Ｃは底部から体部の破片であり、胎土及び焼成から同一個体と思われる。４～７は第２遺構面の基盤層出土遺物である。４は須恵器の坏蓋で、天井部にヘラ削りを施す。５は土師器の甕、６・７はサヌカイトの石製品である。６は石匙が破損したため、再度加工しなおしたものと思われる。７は最大長2.1cm、最大幅1.6cmの鏃である。

第４節　小結

今回の上講武清水遺跡の調査では、西向きの丘陵斜面で２つの遺構面を検出することができた。上層の第１遺構面からは土坑３個（SK01～03）、下層の第２遺構面からは掘立柱建物跡１棟（SB01）、溝状遺構２本（SD01、02）と多数の柱穴が見つかっている。以下、各遺構面について若干触れまとめとしたい。

まず、下層の第２遺構面について述べてみたい。SB01の床面及び覆土から７世紀末から８世紀前半頃の須恵器の蓋や回転糸切痕の底部が出土し、また、SD02からも同時期と思われる坏が出土している。第２遺構面より上層の遺構外出土遺物の多くも同時期のものであり、第２遺構面の時期は７世紀末から８世紀前半と考えられ、この頃に集落が存在していたと思われる。この他、遺構面直上からは縄文時代から弥生時代と考えられる石製品や古墳時代の須恵器坏蓋が出土し、当該期の遺構が存在する可能性も考えられる。本調査区の北西側には寺の奥古墳群や寺の奥横穴群があり、それらに係わりのある集落であったのかもしれない。

次に、上層から検出された第１遺構面からは土坑３個を検出するにとどまった。これらの土坑は等間隔で一直線上に並んでおり、底部に20cm程のやや平たい河原石が置かれているという共通点をもっていた。また、土坑底部の標高も同じであり、礎盤石を伴う掘立柱建物の可能性が考えられた。土坑内からは８世紀中頃以降の須恵器の蓋や坏が出土しており、これ以降の遺構と考えられる。撹乱のため土層の先後関係を捉えることができなかったが、第１遺構面の覆土、第10層から、９世紀～10世紀頃の褐色系の須恵器の坏（第18図－10）が出土しており、この時期が第１遺構面の時期と考えられた。調査区南東側では、何度も遺構の精査を繰り返したが明確な遺構検出にはいたらず、第２遺構面で遺構の精査をするに至った。そのため、第２遺構面のなかには第１遺構面から掘り込まれた遺構が存在する可能性があることをお断りしておく。

今回の調査では、検出された遺構の割に出土遺物は多く、特にSB01と同時期の遺物が多く出土している。遺構の検出状況や周辺の地形から遺跡は南側に続いている可能性が高い。

講武盆地における集落遺跡が調査されたのは初めてであり、後述する上講武大石遺跡の調査成果と合わせて当地域における古代の集落の在り方が徐々に解明されつつある。

【注】

註１　島根県古代文化センター『山雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性』　2010年の年代観による。以下、須恵器の年代観はすべてこれによる。

【参考文献】

島根県教育委員会「古曽志平廻田遺跡」『古曽志遺跡群発掘調査報告書』　1989年
松江市教育委員会「長峯遺跡」『小竹矢１号墳・長峯遺跡』　昭和61年
中国電力株式会社島根支店・島根県教育委員会
「神田遺跡」『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書』　昭和62年
島根県古代文化センター『山雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性』　2010年

遺物観察表

土器

遺構番号	出土層位・遺構面	種別	器種	法量(cm) 口径	底径・脚部径	器高(残存)	色調 内面	色調 外面	調整 内面	調整 外面	備考
9-1	SK01	須恵器	坏	14.6	…	4.5	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	
11-1	SK02	須恵器	甕	15.0	—	1.7	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
14-1	SB01	須恵器	蓋	8.6	…	2.1	灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	
14-2	SB01	須恵器	皿	—	底径9.2	0.9	灰色	灰色	静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
16-1	SD02	須恵器	坏	11.4	—	3.5	灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	
17-1	ピット	須恵器	坏蓋			1.9	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	1条の沈線
17-2	ピット	須恵器	坏身	—	—	2.6	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	
17-3	ピット	土師器	甕	20.0	—	3.3	褐赤色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	外面煤付着
18-1	第7～9層	陶器	施釉	—	底径12.4	5.5	黄褐色	黄褐色	施釉	ケズリ・回転ナデ 施釉 底部ノミ状工具で成形後回転ナデ	
18-2	第7～9層	須恵器	短頸壺	11.2	—	6.8	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
18-3	第7～9層	須恵器	壺	14.3	—	6.1	灰色	灰色	ケズリ・回転ナデ	回転ナデ	肩部上半に1条の沈線
18-4	第7～9層	須恵器	甕片	—	—	6.5	灰色	黒灰色	ナデ ケズリ	タタキ痕	亀山焼系統の土器
18-5	第10層	須恵器	坏身	11.1	受部径14.0	2.8	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ 静止ナデ	
18-6	第10層	須恵器	高台付坏	13.0	—	3.6	灰色	赤褐色 灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部静止糸切り	
18-7	第10層	須恵器	高台付坏	15.6	底径8.2	5.0	淡灰色	淡灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部静止糸切り	
18-8	第10層	須恵器	坏	—	底径7.6	2.6	灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ	
18-9	第10層	須恵器	坏	11.2	—	3.5	淡灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
18-10	第10層	須恵器	坏	11.6	底径6.4	4.6	暗褐色	暗褐色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	軟質
18-11	第10層	須恵器	皿	—	底径7.3	0.7	暗灰色	灰色	静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
18-12	第10層	須恵器	蓋	10.4	…	2.5	灰色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	
18-13	第10層	須恵器	蓋	16.4	—	器高4.0	淡灰色	淡灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	輪状つまみ
18-14	第10層	須恵器	蓋	18.4	—	1.1	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ	
18-15	第10層	須恵器	蓋	25.6	—	29.8	淡灰色	淡灰色	回転ナデ 当て具痕	回転ナデ タタキ痕　カキ目	
18-16	第10層	土師器	甕	26.4	—	4.9	黄褐色	黄褐色	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	
19-1	第23・24層	土師器	甕	25.4		14.0	橙褐色	橙褐色	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	
19-3	第26層	土師器	土製支脚	—	底部最大径9.4	14.3	—	橙色	—	ナデ・ヘラケズリ	
19-4	第28層	須恵器	坏蓋	—	…	2.5	淡灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	1条の沈線
19-5	第28層	須恵器	高坏	—	—	3.7	灰色	灰色	静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	二方向透かし（内形）
19-6	第28層	須恵器	高坏	—	底径12.4	11.3	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 静止ナデ	二段二方向透かし （上段・切れ目、下段・台形） 2条の沈線
19-7	第28層	須恵器	高台付坏	14.0	底径8.0	4.8	淡灰色	淡灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部静止糸切り	

土　器

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	器種	法量（cm） 口径	底径・脚部径	器高（残存）	色調 内面	色調 外面	調整 内面	調整 外面	備考
19-8	第28層	須恵器	高台付坏	14.4	底径7.6	4.6	赤黒灰色	暗灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 静止ナデ ヘラ切り後ナデ	
19-9	第28層	須恵器	坏	13.4	底径7.2	4.2	暗灰色	暗灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 静止ナデ	
19-10	第28層	須恵器	蓋	12.6	—	2.5	淡灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	輪状つまみ
19-11	第28層	須恵器	蓋	12.5	—	3.4	淡灰色～暗灰色	淡灰色～暗灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	輪状つまみ
19-12	第28層	須恵器	蓋	15.1	—	3.4	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	輪状つまみ
19-13	第28層	須恵器	壺	20.6	—	3.8	橙色	橙色	回転ナデ ハケ目	回転ナデ	
19-14	第28層	土師器	把手	—	—	残存長7.4 最大厚4.7	橙色	橙色	—	ナデ・ハケ目 ケズリ	一部黒変
19-15	第28層	土師器	坏	—	底径10.0	5.1	灰色	暗灰色	風化により不明	風化により不明	
19-16	第28層	土師器	壺	18.8	脚部径17.4	5.7	黄灰色	橙色	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	
19-17	第28層	土師器	甕	30.4	—	22.0	黄褐色	黄褐色	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	
20-1	第29・30層	須恵器	坏	12.4	—	4.8	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	
20-2	第29・30層	土師器	甕	20.1		13.4	黄橙色	灰褐色～褐色	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	
20-3	第29・30層	土師器	甑	35.8	底径15.9	31.7	褐灰色	褐灰色	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	孔4ヶ所（孔径0.7）
20-4	第35層	須恵器	坏蓋	—	—	2.4	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ヘラケズリ	
20-5	第35層	土師器	甕	23.8	—	2.3	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	

鉄製品

挿図番号	出土層位・遺構面	遺　期	法量（cm） 最大長	最大幅	最大厚	重量（g）	材質	備　考
16-2	SD02	縄	7.7	2.6	0.4	17.60	鉄	

石製品

挿図番号	出土層位・遺構面	種　類	法量（cm） 最大長	最大幅	最大厚	重量（g）	材質	備　考
17-4	ピット	砥石	8.2	4.5	3.6	261.99	流紋岩	
17-5	ピット	原石	6.1	4.1	5.3	293.65	水晶	
18-17	第10層	棒	4.1	3.4	1.3	17.57	黒曜石	
19-2	第23・24層	敲石	7.2	4.8	4.0	124.28	—	
20-6	第35層	お弦→スクレーパー	3.8	4.2	0.6	7.56	サヌカイト	再加工
20-7	第35層	剥	2.1	1.6	0.5	1.65	サヌカイト	

第4章　上講武大石遺跡

第1節　調査の経過と概要

上講武大石遺跡は北山山系から派生する丘陵の西側斜面に位置する。調査区及び周辺は、丘陵尾根から下る擂鉢状を呈する畑地である。開発範囲内で設定した試掘トレンチ2箇所の内1箇所から柱穴が確認され、遺物が出土した。その後、遺構の範囲を確認するため4箇所のトレンチを増設し遺構の範囲確認をおこなった。その結果、遺構の可能性が考えられた北側から西側斜面について調査をおこなうこととなった。調査区の南側には大石の集落が存在する。

調査区は東西約40m、幅約16m、標高約43～56mを測る。試掘調査結果から、表土から遺構面まで0.1～0.3m程度で、最初に表土掘削をおこなった。調査区内からでた排土は、車両などによる搬出路が確保できないこと、また調査区および周辺が斜面であり、降雨の際に土砂の流失が考えられたため土嚢袋に詰めて積み重ねた。排土の処理に時間を取られ、一向に表土剥ぎが進まなかったため重機を入れ表土剥ぎをおこなった。斜面に沿ってトレンチ3箇所（T-1、T-2、T-3）を設定し、土層観察をおこない調査を進めていった。調査途中、梅雨の豪雨によって調査区北東側周辺に積み上げていた土嚢袋が調査区内に崩れ落ち、再度重機を入れ、土砂の除去をおこない調査を進めた。

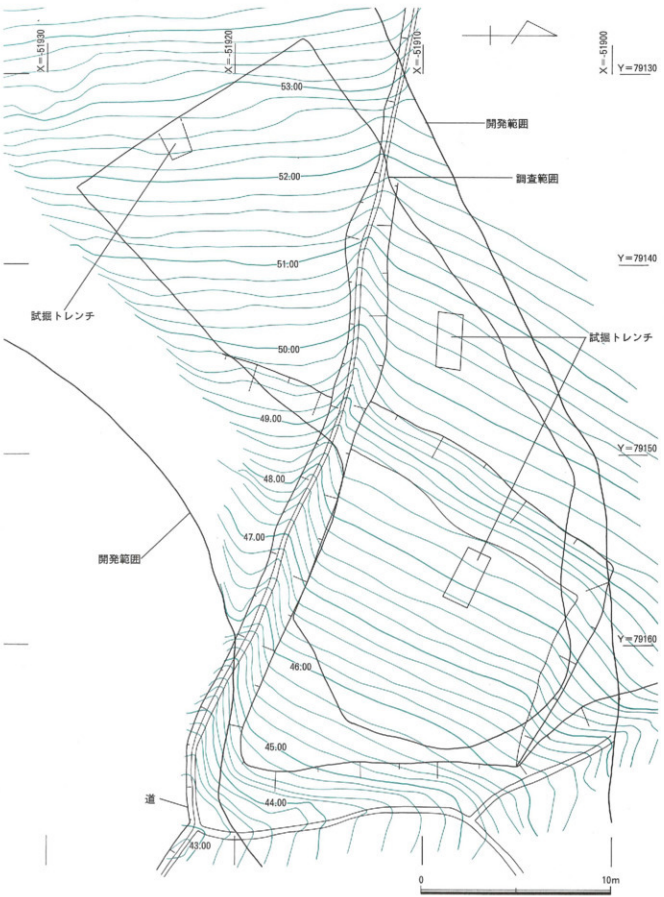
調査の結果、掘立柱建物跡10棟、土坑8基、溝状遺構4条、自然流路3本、多数のピットを検出した。掘立柱建物跡は調査区北西側から西側、標高49.8～52.4mの範囲に集中していた。調査区東側からも柱穴を検出したが建物を復元することはできなかった。調査後直ちに埋め戻しをおこなった。

第2節　土層堆積状況（第22、23図）

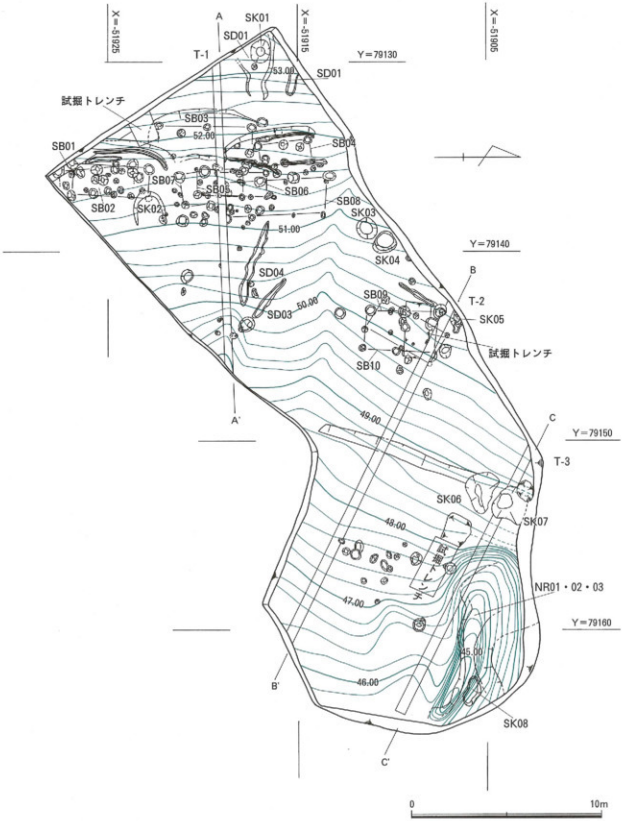
調査区は斜面であるため、堆積土層は部分的に多いところもみられたが、全体的に0.1～0.3mと浅かった。耕作土直下が地山のところも多く、地山所々に畑の痕跡や現代のゴミ穴で撹乱をうけている所がみられた。地山は北側から西側では橙色土から橙褐色土、東側から南側では淡黄褐色土から黄褐色土であった。調査区の東側では、地山面が下がっていく傾向がみられ、褐色から黒褐色の硬くしまった土層が堆積していた。

T-1土層断面（A-A'）第1～第7層は近代以降の堆積土で、陶磁器、ガラス、プラスチックが出土している。東端には落ちがあり、第8～12層が堆積していた。この土層からは奈良、平安時代以降と思われる遺物が出土し、ピットも検出された。第28層（褐色土）はSB03の覆土である。厚さ10cm未満の薄い堆積土層で、土師器片が出土しているが時期は不明である。第23層はSB05、06の覆土と考えられる。厚さ15cm未満の堆積土層で、須恵器や土師器が出土している。SB05、06周辺からは他にSB04やSB07、SB08を検出したが、土層断面や検出状況からは遺構の切り合い関係を判断することはできなかった。唯一第28層が第23層に切られているためSB03よりSB04、05が新しいと考えられた。

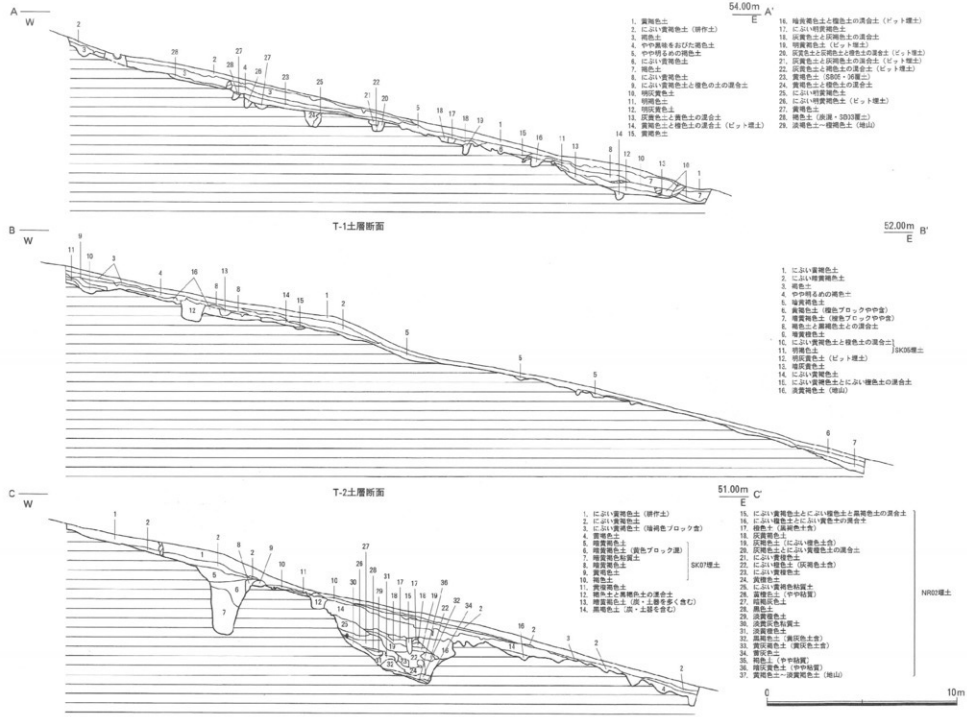
T-2土層断面（B-B'）は調査区のやや中央の土層断面である。1～4層は畑の耕作土や近代以降の堆積土である。土層断面の中央で段状になっているところは、畑の境界をなすもので遺構ではない。（地主さんの話による）第9、10、11層はSK05の堆積土で、須恵器片や土師器片が多く出土した。第12層はSB10のピット埋土である。このピットは地山ではなく第16層上面から掘り込まれている。この土層は、B-B'トレンチ北西側でしかみられず、部分的な堆積土と思われた。



第21図　上講武大石遺跡調査前地形測量図（S＝1：200）



第22図　上講武大石遺跡調査成果図（Ｓ＝1：200）



第23図　土層断面図（S＝1：200）

T-3土層断面（C-C'）は調査区北側の土層断面である。第１～３層は耕作土や近世の堆積土である。第５～８層はSK07の埋土である。第13層はC-C'トレンチの中央付近の堆積土である。この土層は厚さ10～20cm程の堆積土で、須恵器や土師器の土器が一番多く出土した上層である。第15～36層は、後述する自然流路（NR02）の崩落土で、様々な土層が複雑に堆積していた。

第３節　調査の成果

１．SB01（第24、25図）

調査区南西端で検出した掘立柱建物跡である。溝１を伴う建物跡で、西側桁行に３穴の柱穴を検出したが、東側桁行の柱穴は検出できなかった。建物の南側は調査区外に延びると考えられ、正確な規模は不明であるが、桁行２間、梁間１間以上の建物で、現状で桁行3.85mを測る。柱間はP1-P2が2.0m、P2-P3が1.85mである。柱穴は楕円形で上端径0.6m前後、深さ0.35～0.6mを測る。溝１は現状で幅0.15～0.25m、深さ３cm、長さ1.9mを測る浅い溝である。建物の主軸はN-4°-Wを示す。

柱穴内から須恵器や土師器の細片が出土しているが、時期を特定するには至らない。

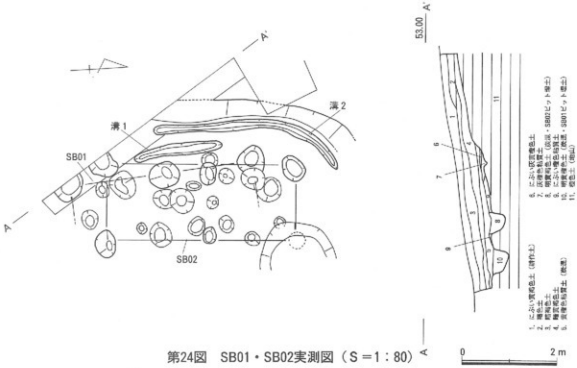
上層断面第１、２層は耕作土、第３、４層は堆積土である。第８層は後述するSB02の柱穴内堆土、第10層はSB01の柱穴内埋土である。SB01の柱穴は地山面から掘り込まれ、SB02の柱穴は地山上の堆積土第９層上面から掘り込まれている。SB01廃絶後にSB02が建てられたと考えられ、SB01よりSB02が新しいと判断された。第５層はSB02の覆土で、この土層からは須恵器の坏や石製品などが出土している。第７層はSB02に伴う溝２の埋土である。

２．SB02（第24、26、27図）

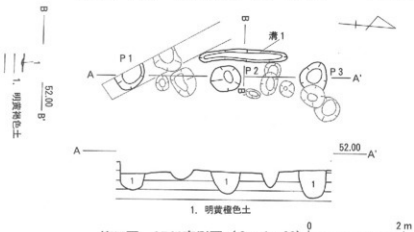
調査区の南西端に位置しSB01と重複する。斜面上方にあたる西側を加工して造られた桁行２間、梁間１間の建物跡である。建物の規模は桁行3.9m、梁間1.4～1.65mを測り、床面は東側に向かって傾斜している。柱間はP1-P2が2.1m、P2-P3が1.8m、P4-P5が2.1mである。付随する溝２は現状で、長さ約4.0m、幅0.15～0.35m、深さ3cmと浅く、北側で緩やかに弓状に曲がる。柱穴は楕円形のものが多く、径0.35～0.55m、深さ0.13～0.43mを測る。柱穴内埋土は炭化物を多く含む明黄褐色土で、須恵器の小片が出土している。建物の長軸方向はN-5.5°-Eを示している。

第27図はSB02の覆土（第24図土層断面）第５層の出土遺物である。１～４は須恵器である。１は体部が外反しながら立ち上がる皿、２は回転糸切り痕の皿底部である。３は口径12.8cm、器高4.5cmを測る坏で、体部が外傾しながら直線的に立ち上がり、９世紀前半頃のものである。[註１]底部外面にわずかに回転糸切り痕がみられる。口縁端部の数ヶ所に油煙の痕がみられる。４の坏も３と同時期のもので、口径12.2cm、器高4.0cmを測る。底部外面に墨書文字がみられ、２文字が書かれていると思われる。上の文字は「丈」、「左」、「右」、下の文字は“犭”辺の文字の可能性が考えられた。[註２]内面、特に口縁に近い部分には油煙の痕が黒く残り、坏を燈明皿として使用または転用したものと思われた。墨書土器は調査区内で１点しか出土していない。５は土師器の甕、６は砥石である。６は長さ25.9cm、厚さ2.3cm、凝灰岩製である。片面に深さ1.5mmの筋状の溝があり、筋をつけて割ろうとしたすり切り痕がみられる。また全体に尖ったものを研いだ筋状の痕跡が多くみられた。

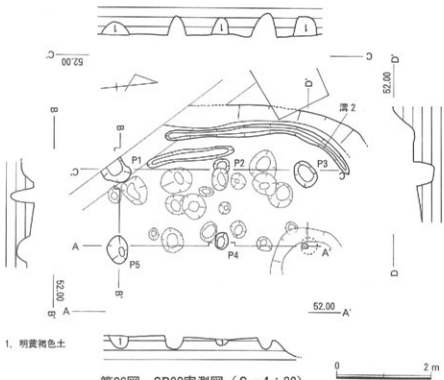
SB02は覆土出土遺物から９世紀前半の建物跡と考えられ、SB01はそれ以前のものと推測される。



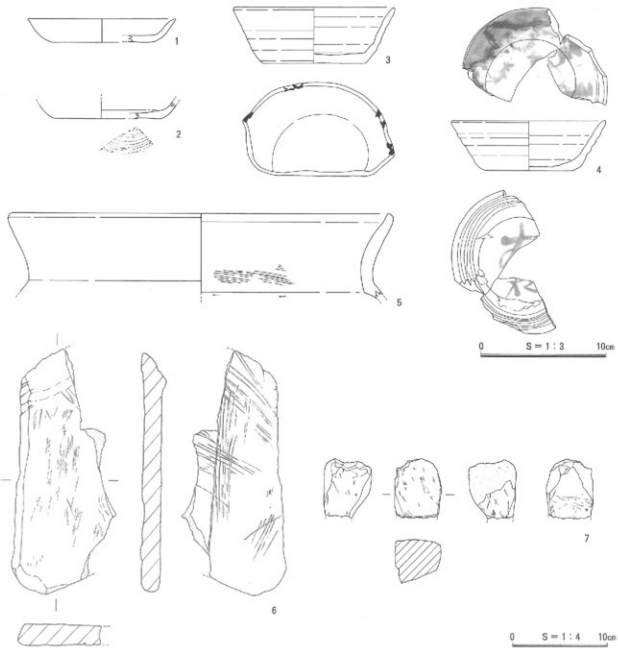
第24図　SB01・SB02実測図（S＝1：80）



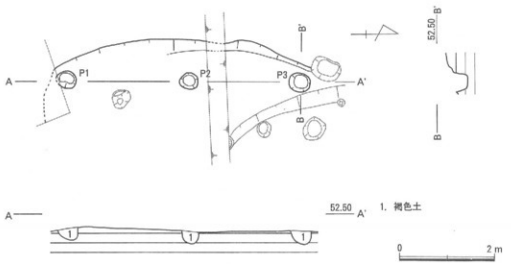
第25図　SB01実測図（S＝1：80）



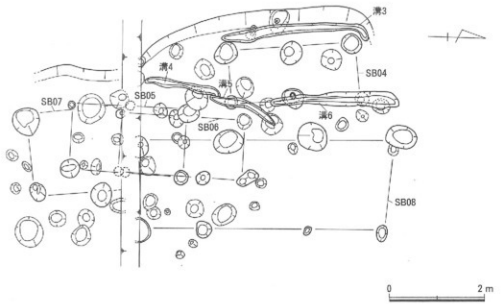
第26図　SB02実測図（S＝1：80）



第27図　SB02覆土出土遺物



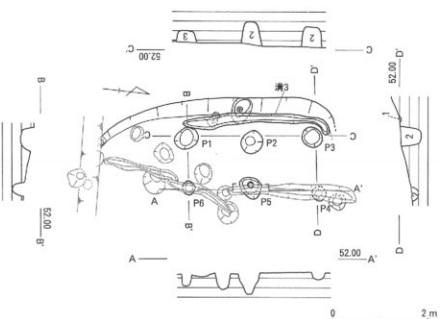
第28図　SB03実測図（S＝1：80）



第29図　SB04～08実測図（S＝1：80）

3．SB03（第28図）

調査区西側で検出した建物跡である。東側桁行柱穴や溝は検出していない。桁行２間、梁間１間以上の建物跡である。桁行は4.86mで、柱間はP1-P2が2.5m、P2-P3が2.36mを測る。柱穴はほぼ円形で径が0.4m前後、深さ0.25m前後、柱内埋土は褐色土である。建物の長軸はN-0.5°-Eを示し、等高線にほぼ平行する。



第30図　SB04実測図（S＝1：80）

柱穴内から遺物は出土していない。SB03覆土（A-A'土層断面第28層、褐色土）から土師器片が出土しているが、時期は特定できない。

4．SB04～08（第29図）

SB04～08はSB03の東側で検出した建物群で、当初はひとつの加工段として認識していたものである。覆土の厚さもなく、断面から切り合い関係を知ることはできなかった。斜面に沿って少しずつ土層を除去し、幾度となく精査をおこなったが、平面からも切り合い関係を明確にできなかった。結局、柱穴や溝は地山面において検出した。柱穴についてはその並びを検討しながら検出作業を行い、数多くの柱穴を検出したが、完全な配置を抽出することはできなかった。検出した周溝と思われる溝や加工段から、現段階で可能性が考えられる建物を復元した。

5．SB04（第29、30図）

調査区西側、SB03の東側で検出した桁行２間、梁間１間の建物跡である。斜面を加工し、壁際から幅0.1～0.2m、深さ２cmの浅い溝３を検出した。建物の規模は桁行き2.66m、梁間1.0～1.15mを測

り、桁行の柱間は1.3m前後である。P1、P6の南側には３穴の柱穴がみられるが、位置的にこの建物に伴うものとは考えにくく、床面南側には何らかの空間を有していたと思われる。柱穴の平面形は円形、上端径は0.3～0.45m、深さ0.15～0.5mを測り、長辺主軸はN-6.5-Wである。遺物は出土していない。

６．SB05（第31～33図）

桁行２間、梁間１間以上の建物跡で、現状で桁行2.45m、梁間1.35mを測る。桁行の中間柱穴はT-1トレンチ掘削によって検出できなかったが、柱穴は径0.15～0.4m、深さ0.2～0.6mを測る。溝４はSB05伴う溝で、部分的に検出し、現状で長さ1.6m、幅0.2m前後、深さ2cmである。この溝は北側で東側に折れていき、溝５によって切られているため、溝５を伴うSB06より古いと考えられた。主軸はN-2.0°-Eである。

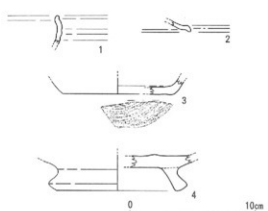
第31図はSB05・06の覆土（T-1土層断面第23層、黄褐色土）から出土した遺物である。１は８世紀前半頃の坏の口縁、２は口縁端部が短く立ち上がる蓋で８世紀後半から９世紀前半のものである。３は回転糸切り痕をもつ坏底部、４は高台が「ハ」の字状に開く長頸壺の底部で７世紀末から８世紀前半頃のものである。

第33図-１はP1から出土した回転糸切痕の坏底部である。体部が直線的に開く坏で、淡褐色を呈しているが須恵器と思われる。８世紀後半から９世紀前半頃のものではなかろうか。他に土師器の細片が出土している。

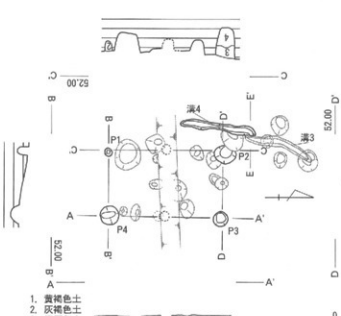
SB05は８世紀後半から９世紀前半の建物跡と考えられた。

７．SB06（第34、35図）

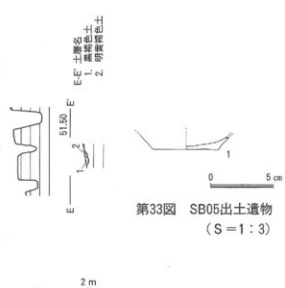
SB06は溝の切合い関係からSB05より新しいと考えられた建物跡である。桁行２間、梁間１間以上の建物



第31図　SB05・SB06覆土出土遺物（S＝1：3）



第32図　SB05実測図（S＝1：80）



第33図　SB05出土遺物（S＝1：3）

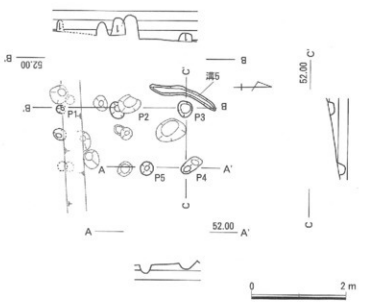
跡で北から南に延びる溝５を伴う。建物の規模は桁行2.64m、梁間1.3mを測る。柱間はP1-P2が1.24m、P2-P3が1.4m、P4-P5が0.85mと狭く均等な間隔ではない。東側柱穴列の南側の柱穴は検出できなかった。溝５は部分的にしか検出できず、現状で1.45m、幅0.15m、深さ２cmを測る。柱穴は上端径0.25～0.4m、深さ0.15～0.37mである。建物の主軸はN-0.5°-Eを示す。

第35図-１はP４から出土した須恵器の甕片である。調整は内側がナデ、外側ハケ目を施す。

SB06から時期を判断できる遺物が出土していないが、SB05と大差ない時期の建物と推測される。

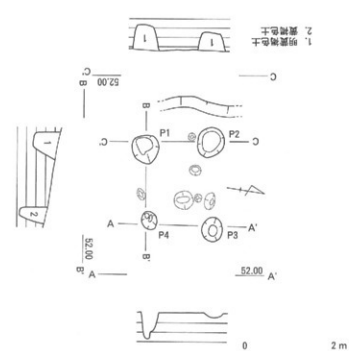
８．SB07（第29、36、37図）

この建物跡は桁行１間、梁間１間以上の柱穴配置とわずかにみられる加工段によって構成される可能性があるものである。溝はなく、柱穴を４穴検出した。柱間はP1-P2が1.3m、P3-P4が1.4m、南側梁間は1.53mを測る。柱穴の径は0.35～0.55m、深さ0.15～0.5mで平面楕円形を呈する。柱痕は

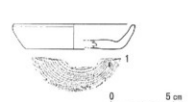


第34図　SB06実測図（S＝1：80）

第35図　SB06出土遺物（S＝1：3）



第36図　SB07実測図（S＝1：80）



第37図　SB07出土遺物（S＝1：3）

みられなかったが、P1、P2は大きさも深さもある柱穴である。建物の長軸方向はN-7.5°-Wを示している。

第37図-1はP1から出土した須恵器の皿である。底部外面に明瞭な回転糸切痕をもち、体部はやや内湾しながら立ち上がる。8世紀中葉から9世紀前半のものである。建物の時期も同時期であろう。

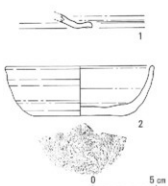
9．SB08（第29、38、39図）

SB04の東側で検出した桁行３間、梁間１間の建物跡である。建物の南側はSB05、06と重複する。桁行5.4m、梁間1.8～2.05mを測る。西側柱穴列桁行の柱間は全て1.8m、東側柱穴列桁行の柱間はP5-P6が1.5m、P6-P7が2.2m、P7-P8が1.55mである。西側桁行柱穴の径は約0.6m、深さ約0.4m、東側桁行柱穴の径は0.15～0.3m、深さ約0.15mを測り、東側桁行柱穴は西側桁行柱穴に比べると径も小さく、深さも浅い。東側柱穴は底の一部が残っているものと判断される。溝６は現状で長さ2.6m、幅0.15～0.3m、深さ8cmの浅い溝である。建物の長軸方向はN-2.5°-Wを示す。

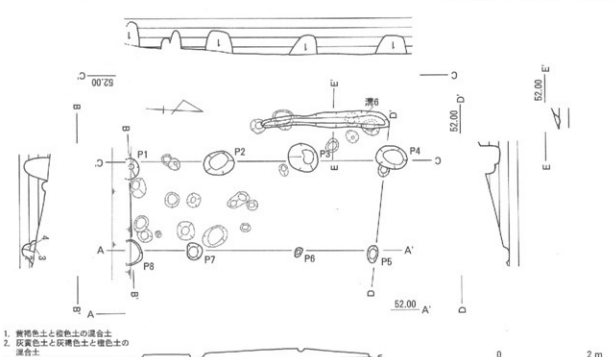
第39図はSB08の柱穴内（P1、P3）から出土した遺物である。1は口縁端部がわずかに屈曲する蓋で８世紀末から９世紀前半、２は体部が内湾しながら立ち上がる坏で８世紀中葉から９世紀前半のもので、建物の時期もこれに併行するものと考えられる。

10．SB09（第40～42図）

調査区北西側で検出した桁行２間、梁間１間の建物跡で、桁行き3.8m、梁間1.85mを測る。加工段はみられなかったが、建物に付随する長さ2.3m、幅0.15～0.25m、深さ２cmの浅い溝７を検出した。東側柱穴列の北側柱穴は検出できなかった。柱間はP1-P2が1.85m、P2-P3が1.95m、P4-P5が2.15mとやや広い。柱穴径は0.2～0.44m、深さ５～20cmと浅い。P1には柱痕が認められるが細く、しっかりとした建物ではなく、簡易的な建物であった可能性も考えられる。建物の長軸方向はN-31°-Eを示す。SB09のP4と後述するSB10のP5には平面から切り



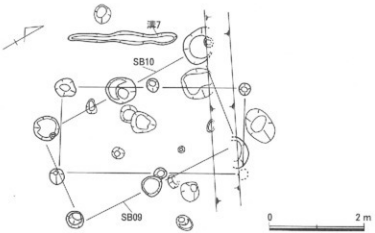
第38図　SB08出土遺物（S＝1：3）



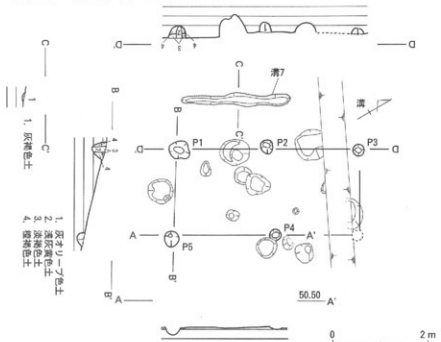
第39図　SB08実測図（S＝1：80）

合い関係が認められ、SB09のＰ４が埋まった後にSB10のＰ５が掘られていた。SB09がSB10より古いと考えられた。

第42図-１はＰ１から出土した高坏の脚端部で、古墳時代以降のものである。Ｐ２、Ｐ５埋土（灰オリーブ色土）と同様の埋土を持つ周辺の柱穴から、８世紀代と思われる坏の口縁小片が出土していることから、SB09は８世紀以降の建物跡の可能性が高いと考えられる。

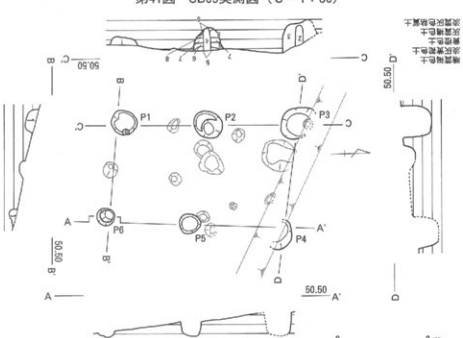


第40図　SB09・SB10実測図（Ｓ＝１：80）

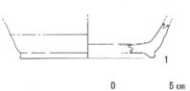


第41図　SB09実測図（Ｓ＝１：80）

第42図　SB09出土遺物
（Ｓ＝１：3）



第43図　SB10実測図（Ｓ＝１：80）



第44図　SB10出土遺物
（Ｓ＝１：3）

11. SB10（第40、43、44図）

SB09と重複する桁行2間、梁間1間の建物跡である。建物の規模は桁行3.6m、南側梁間1.95m、西側梁間2.15mを測る。西側柱穴列桁行の柱間は1.8m、東側柱穴列の柱間はP4-P5が1.9m、P5-P6が1.7mである。柱穴径は0.35～0.65m、深さ0.15～0.65mでP2、P3に太さ0.15m程の柱痕が認められた。建物の長軸方向はN-1.5°-Eを示す。

第43図-1はP5出土遺物である。須恵器の高台付坏で、体部が直線的に立ち上がり、底部外縁に低い高台が付くものである。8世紀中葉から9世紀前半のもので、同時期またはそれ以前の建物跡と推定される。

12. SD01・02（第45図）

調査区西端で検出した遺構である。

SD01は西から東に向かって斜面に平行する溝状遺構で、西側は未検出だが更に調査区外へと続いている。現状で長さ1.55m、幅0.42m、深さ0.13mを測る。断面形はU字形である。遺物は出土していない。

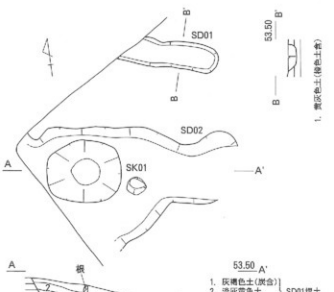
SD02はSD01の南側で検出した不整形な溝状遺構で、SD01に平行する。東側は斜面であったため削平され、西側は未検出だが更に調査区外へと続いている。溝の規模は現状で長さ3.5m、幅1.0～2.0m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していない。

13. SK01（第45図）

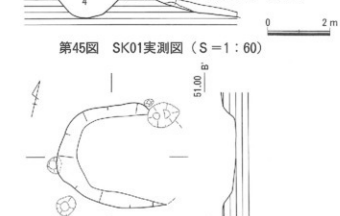
SK01はSD02完掘後に底面からプランを検出した土坑で、SD02より古いと考えられる。土層断面第1～3層はSD02の埋土、第4層はSK01の埋土である。東西1.2m、南北0.98m、深さ0.53mの円形土坑で遺物は出土していない。

14. SK02（第46図）

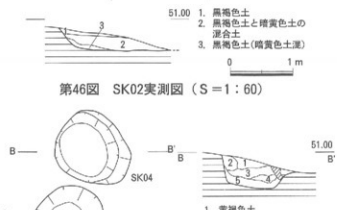
調査区南西側、SB01、02の東側で検出した土坑である。土坑の南側は削平され、北側は柱穴によって切られていた。SB01、02の床面精査中にプランを検出し、SK02が埋まった後SB



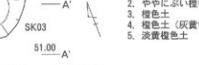
第45図　SK01実測図（S＝1：60）



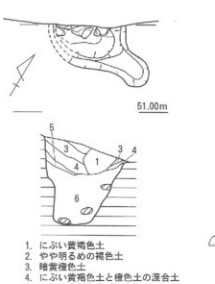
第46図　SK02実測図（S＝1：60）



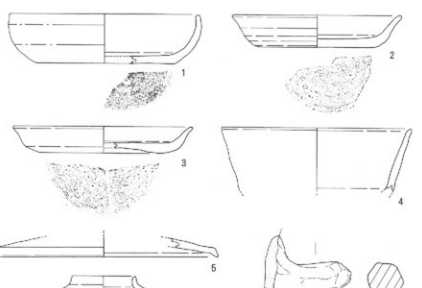
第47図　SK03・SK04実測図（S＝1：60）



第48図　SK03出土遺物（S＝1：3）



第49図　SK05実測図（S＝1：40）



第50図　SK05出土遺物（S＝1：3）

01、02が建てられていた。遺物は出土していない。

15. SK03・04（第47、48図）

調査区北西端、SB09、10の西側で検出した土坑である。二つの土坑は0.1mの間隔で並び、地山面から掘り込まれていた。SK03はSK04の南西側に位置する。

SK03は南北1.12m、東西1.14m、深さ0.6～0.7mの円形の土坑である。地山面と似たような明褐色土が堆積し、土坑内からは皿の底部が出土している。風化しているが、わずかに回転糸切り痕がみえる。8世紀中葉以降のものと推定される。

SK04は南北1.25m、東西1.1m、深さ0.37mの円形土坑である。一部2段になっており、橙色系の土層が堆積していた。土坑内からは土師器の細片が出土したが、時期は特定できない。

16. SK05（第49、50図）

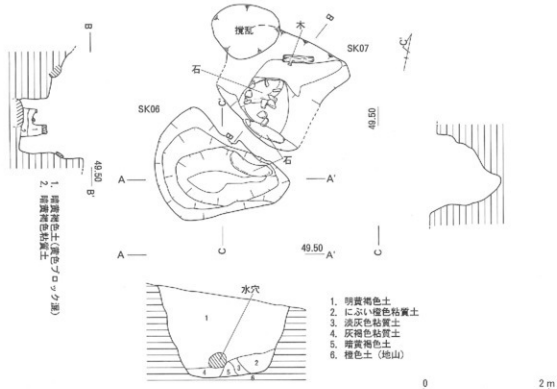
SK05は調査区の北西側、SB09、10の北側で検出した土坑である。現状で東西1.23m、南北0.27～0.53m、深さ0.9mの不整形な土坑で、西側は調査区外へと続いている。土坑底面から10cm前後の石が数個出土した。土坑内には炭を多く含む土層が堆積していた。

第50図は土坑内出土遺物である。1～6は須恵器、7は甕の把手である。1は体部が内湾する坏で、底部にわずかな回転糸切り痕が残る。2、3は口縁部が外反しながら立ち上がる皿で、8世紀中葉から9世紀前半のものである。4は体部が直線的に立ち上がるもので2、3と同時期頃と思われる。5は扁平で口縁端部は屈曲し、宝珠状つまみが付くと思われる蓋である。8世紀後半から9世紀代とみられる。6は短頸壺である。出土遺物から8世紀後半から9世紀初前半頃の土坑で、SB09、10と同時期と考えられ、同時に存在していた可能性も考えられた。

17. SK06（第51図）

調査区北東側で検出した土坑である。二つの土坑はほぼ南北方向に並び、地山面から掘られていた。

SK06は東西2.1m、南北0.77～1.77m、深さ1.47mの不整形な土坑である。底面は狭く、土層断面をみると擂鉢状を呈している。底の北側にみえる石は、SK07の南側の石と同一個体で、本調査区地



第51図　SK06・SK07実測図（Ｓ＝1：60）

山内にみられる自然の石である。

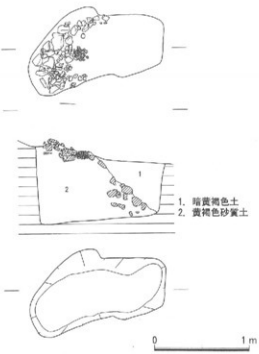
18. SK07（第51、52図）

SK07はT-３トレンチ掘削時に発見した土坑である。遺構の北側は調査区外へと続き、北西側は現代のゴミ穴によって壊されていた。土坑内には黄褐色土の地山と似たような土層（第23図T-３土層断面第５～８層）が堆積していた。土坑の規模は東西2.1ｍ、南北1.43ｍ、深さ1.05ｍを測り、不整形である。底には数個の石があり、北壁には木材が入り込んでいた。第52図-１は、土坑内土層第７層から出土した端反りの磁器の口縁で、19世紀代以降のものである。SK07も同時期と考えられる。

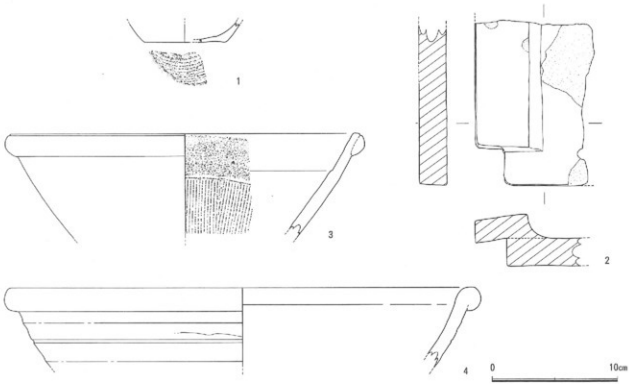
第52図　SK07出土遺物（Ｓ＝1：3）

19. SK08（第53、54図）

調査区東側で検出した土坑である。後述するSR01、02掘削時に発見したもので、SR01埋土を基盤にしていた。検出面の北側から大きさ５～20㎝の石や２㎝前後の小礫が多数出土し、その石や小礫の間から遺物が出土している。また、土層断面をみると、石は土坑内の南側に向かって落ち込んでいた。石、礫は第２層（黄褐色砂質土）の上側から多く出土し、この土層は土坑中央から東側では底面に向かって落ち込んでいた。推測ではあるが、何らかの構造物が土坑内にあり、そ



第53図　SK08実測図（Ｓ＝1：40）



第54図　SK08出土遺物（Ｓ＝1：3）

れが朽ちたことによって上面に置かれていた石や礫が土層と一緒に落ち込んだ可能性も考えられるが、性格不明の土坑である。土坑の規模は長辺1.4m、短辺0.76m、深さ0.8mを測る。

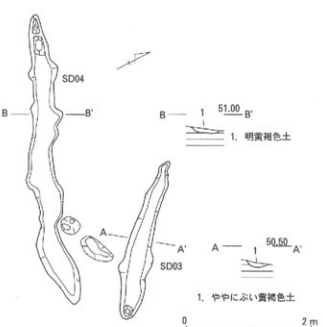
第54図-１は須恵器の皿底部である。２～４は検出面の礫と一緒に出土した遺物である。２は桟瓦。断面が平らで、家の塀の上に置くための桟瓦と考えられ、17世紀末以降のものである。３は擂鉢、４は鉢である。３は在地系の擂鉢で、近世末か近代以降と思われ、土坑の時期も同時期または大差ない時期と推定される。

20．SD03・04（第55、56図）

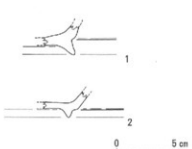
調査区南西側に位置し、SB08の東側で検出した２条の溝状遺構である。コンタに直交し、西側から東側に向かって延びる。SD03はSD04の北東側に位置する。

SD03は長さ2.57m、最大幅0.48m、深さ8cm、断面形U字形の溝で、須恵器の小片が出土しているが、時期は不明である。

SD04は長さ4.58m、最大幅0.48m、深さ8cm、断面形U字形を呈する。遺構内から高台付坏が出土した。第56図-１、２は埋土から出土した



第55図　SD03・SD04実測図（Ｓ＝1：60）



第56図　SD04出土遺物（Ｓ＝1：3）

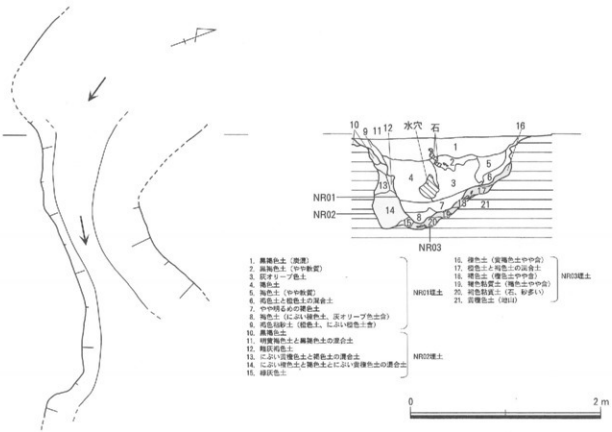
土器である。１は土師器の坏底部、２は須恵器の坏底部であるが、風化しているため調整は不明である。高台が低く、底部外縁に付き８世紀中葉から９世紀前半頃のものと思われる。遺構の深さが浅く、この遺物の時期が遺構の時期に併行するとは思われないが、その可能性は考えられる。

21．NR01・02・03（第57～60図）

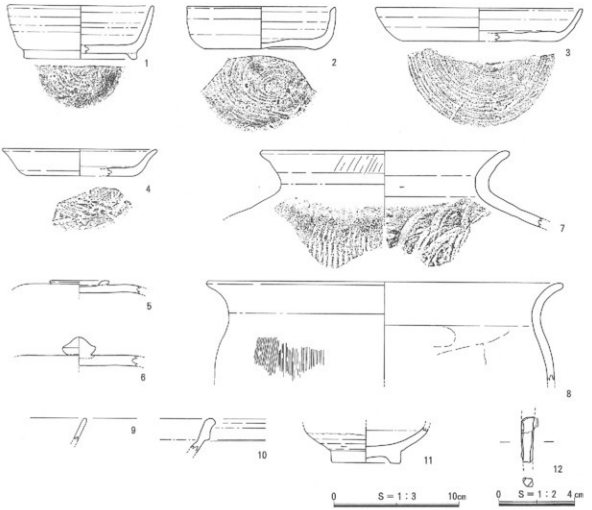
調査区東側で検出した。西から東へ縦断して東流する自然流路で、調査区北側からＳ字状に蛇行していた。プラン検出後、トレンチを設定し掘削した。土層断面から流路は３本あったと考えられ、上から、NR01、02、03とした。

土層断面第１～９層はNR01の堆積土である。黒褐色系の土層が堆積していた。土層内から多くの須恵器や土師器に混じって陶器類が出土し、NR01最下層第９層から陶器の火入れが出土している。土層断面南側の第10～15層は、NR02が蛇行し、流水が攻撃するところ（攻撃面）の崩落土である。第23図、T-３土層断面第15～36層もこの崩落土と同じものである。別々の土層が混じり合った様な土層が多く、土師器、須恵器、石製品が出土している。第16～20層はNR03の堆積土で、須恵器、土師器が出土した。特に最下層、第20層からは多くの土器が重なるような状況で出土している。NR03の堆積土第20層の上に、NR02の崩落土第15層が堆積しており、NR03が埋まった後、NR02の急激な流れがあり、攻撃斜面の土質が崩落した。その後近世以降にまた新たにNR01の流れ存在したと考えられた。NR01、NR02に関しては遺物の取り上げだけをおこない、NR03まで掘り下げた。調査途中、雨によって遺構北側の土嚢が崩れ、遺構の一部が損壊してしまった為全容はわからなかった。

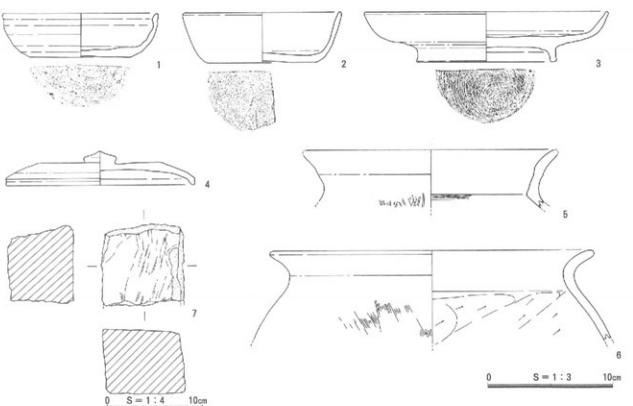
NR03の規模は現状で長さ11m、幅1.72～5.1m、深さ1.0～1.9mを測る。底面は北西側から土層断面の畦を設定した場所までは急激に傾斜しているが、そこから西側になると緩やかである。SR02最下層から出土した土器は大半がこの緩やかになったところから出土している。



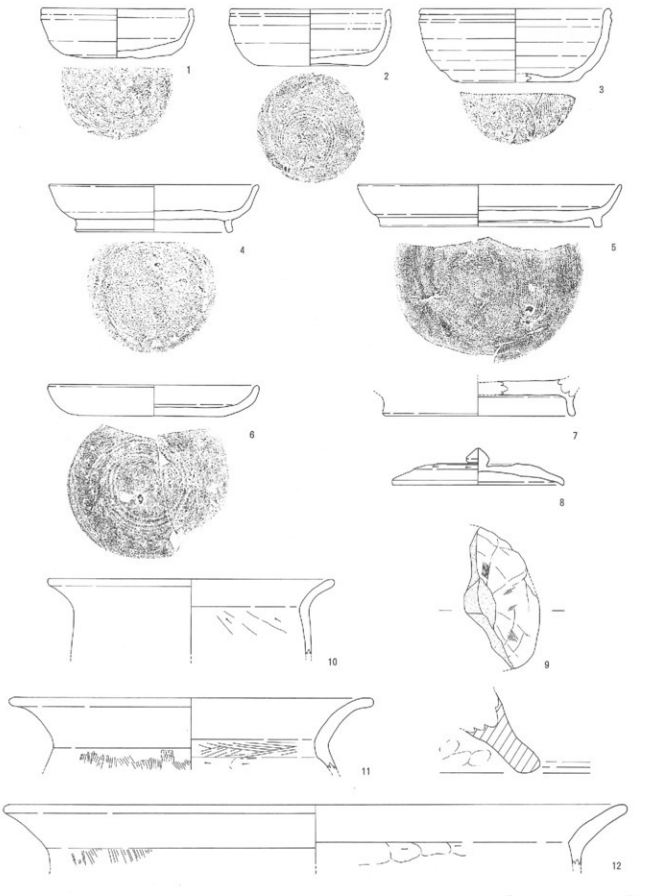
第57図　NR01・02・03実測図（Ｓ＝1：60）



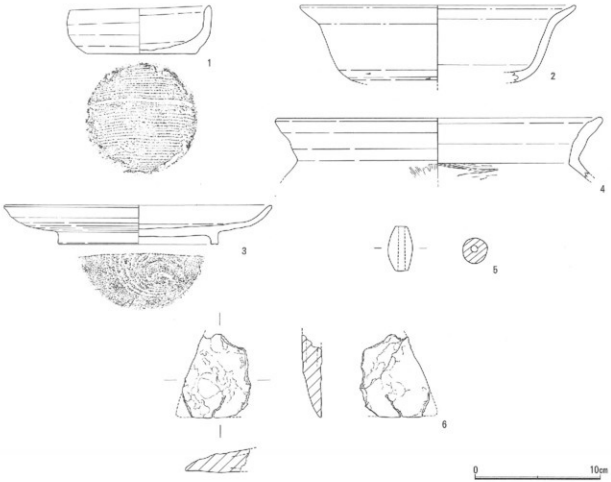
第58図　NR01出土遺物



第59図　NR02出土遺物



第60図　NR03出土遺物（S＝1：3）



第61図　遺構外出土遺物（Ｓ＝1：3）

第58図はNR01出土遺物である。1～7は須恵器、8は土師器、9～11は陶器、12は鉄製品である。1は高台外縁に高台が付き、体部が直線的に立ち上がる坏、2は無高台の坏、3、4は皿である。いずれも底部外面に明瞭な回転糸切り痕がみられる。4は口径12.2㎝、器高2.1㎝を測り、口縁が外反するもので灯明皿形土器と思われる。完形の1/5程度で、内面に煤や釉煙の痕跡はみられない。灯明皿として使用されていたものと考えられるが、安来市の才ノ神遺跡から出土した灯明皿形土器のように、共献用の器や酒杯などといった他の使用形態も推測された。8世紀中葉から9世紀前半のものである。5は輪状つまみ、6は宝珠つまみの蓋である。7は須恵器の甕、8は土師器の甕である。9は17世紀～18世紀中頃までの陶胎染付の碗、10は17世紀代の肥前系の擂鉢、11は内面に釉がみられないため火入と思われる。17世紀代の肥前系でのものである。

第59図はNR02の出土遺物である。1～4は須恵器。1、2は坏、3は高台付の皿、4は宝珠つまみの蓋でいずれも8世紀中葉から9世紀前半のものと思われる。5、6は土師器の甕で、5の甕は頸部内外面にハケ目を施す。古墳時代中期以降のものと思われる。7は厚さ7㎝程の砥石である。1面だけに使用痕がみられる。

第60図はNR03の出土遺物。1～8は8世紀後半から9世紀前半の須恵器である。1～3は無高台の坏で、3は口径14.8㎝、器高5.9㎝と大きく、口縁端部外面に明瞭なくびれがみられる。4は高台付の皿、6は無高台の皿、5は口径20.8㎝、底径17.4㎝、器高3.4㎝の盤で、いずれも底部外面に回転糸切り後ナデ調整をおこなう。7は淡褐色を呈し、底部外周に高台が付くものである。9は器高が低く、宝珠つまみが付く蓋でSR02底面から出土している。9～12は土師器である。9は土製支脚の脚

端部、10～12は甕で、11は古墳時代の甕である。

出土遺物から、NR01は近世以降、NR03は8世紀後半から9世紀前半頃、NR02はNR01と大差ない時期の流路と考えられる。古代と近世において同じような場所で流路が確認されたことは、その時代においてこの場所が周囲よりも低い地形にあったと思われる。古代から近世の間に幾度となくこの場所が流路となっていたのかもしれない。

22. 遺構外出土遺物（第61図）

1～4はT-3土層断面、第13層から出土した土器である。この土層はT-3より南側の堆積土層である。須恵器の坏や皿、土師器の甕など多くの遺物が出土した。遺構内から出土した土器と類似しているため、4点のみ記載した。1は静止糸切りの坏で、糸切り痕が明瞭である。2は体部が直線的に立ち上がり、口縁が外反する鉢で、口径22.0cmを測る。3は高台付の皿、4は甕の口縁である。5は耕作土から出土した須恵質の土錘である。6は鉄製品。鍬先か鋤先と思われる。

第4節　小結

上講武大石遺跡の調査では掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、柱穴を検出した。

掘立柱建物跡10棟は、標高49.8～52.4mの範囲に建てられていた。調査区西側に8棟、北西側に2棟にあり、建物は左右上下で重複していた。加工段を確認できたのは3棟、周溝を一部でも検出したのは7棟、うち3棟の周溝は緩やかな弓状を呈していた。

梁間が不明なものもあるが、桁行3間、梁間1間のものはSB08だけで、大半は桁行2間、梁間1間の小形の建物跡であった。出土遺物は少なく、その大半が8世紀中葉または後半から9世紀前半のもので、詳細な時期差はわからなかった。覆土や柱穴や溝の切合関係からわかっている建物の新旧関係は、SB01（古）→SB02（新）、SB03（古）→SB04→SB05→SB06（新）、SB09（古）→SB10（新）である。位置や軸から建物の構成を推察すると、SB01とSB05またはSB06がひとつの群、SB02、SB08、SB10がもうひとつの群と考えられ、それぞれ同時期の存在した可能性が考えられた。SB06はSB05と軸や位置が変わらないため、建替えられたのかもしれない。SB09の軸だけは他の建物と異なっていた。建物跡周辺から多くの柱穴が検出され、狭い範囲に建物が幾度も建てられた可能性が推測された。出土遺物から8世紀中葉または後半から9世紀前半の集落跡と考えられた。

古代において調査区の地形がどのようなものであったかわからないが、検出した建物跡の床面が斜面下側に傾斜し、その側の柱穴が加工段側の柱穴に比べ浅いことから、今より床面が水平だった可能性も考えられる。

調査区内からは掘立柱建物と同時期の遺物が多く出土したが、なかには古墳時代の土器や近世以降の陶器が含まれ、付近に同時期の遺構が存在する可能性が考えられた。出土遺物のなかで注目されるのはSB02覆土から出土した須恵器の坏（第27図－4）である。坏を灯明具として利用したもので、外側には墨書文字、内側には油煙がみられる。灯明皿形土器は8世紀後半～末頃集中して使われていた。しかし、9世紀代になると須恵器窯が複雑化し、一貫した生産体制が崩れたことや須恵器窯の分散化によって、仏教関係遺跡からの出土が多い灯明皿形土器は定型化せず短期間で衰退したと推測された。[注3] 9世紀代にはいると坏や皿が灯明具として使われるようになり、出雲国府跡や堀平遺跡からは煤の付いた坏や皿が出土している。本調査区から出土した坏もこの時期と併行する。墨書文字を解読することができなかったことは残念であり、調査区内から他に墨書土器は出土していない。墨書土

器が多数出土し、また特別な文字が書かれているような場合は大きな寺院や公的施設の可能性も考えられるが、今回のように数が少ない場合はその可能性も少ないと考えられる。近年、今回と同様に住居跡の発掘調査により、少量の墨書土器が出土する事例が報告されており[注4]、文字を認識できる人が寺院や公的施設ばかりでなく、他にも存在していたのかもしれない。

上講武清水遺跡は７世紀末から８世紀前半頃の集落跡、上講武大石遺跡は８世紀中葉から９世紀前半の集落跡が検出された。両遺跡とも丘陵の緩斜面に営まれ、上講武大石遺跡より上講武清水遺跡の集落が６～７ｍ標高の高い所に位置していた。上講武盆地周辺においては広い平地がなく、今回の一連の調査を通して集落は山の緩斜面に転々と営まれている印象をもった。

今回の両遺跡の調査によって、講武盆地における集落の在り方明らかになり、古代の人々の生活の一端を知ることができたことは有意義であった。

【註】

註１　島根県古代文化センター『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性』　2010年の年代観による。以下、須恵器の年代観はすべてこれによる。

註２　東京大学大学院人文社会系研究科　教授　佐藤信氏のご教示による。

註３　山本道路公団中国支社　島根県教育委員会「荒畑遺跡」
「荒畑遺跡・ラント遺跡・野出遊跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　11」

註４　八雲村教育委員会　青木ゆうゆう住まいづくり事業に伴う「青木遺跡第１調査区終了報告書」　1996年８月

【参考文献】

島根県教育委員会『史跡出雲国府跡』　2008年
日本道路公団中国支社　島根県教育委員会
『堤平遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　８』　2002年
島根県古代文化センター『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性』　2010年

遺物観察表

土器

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	器種	法量（cm） 口径	底径・脚部径	器高（残高）	色調 内面	色調 外面	調整 内面	調整 外面	備考
27-1	SB02覆土	須恵器	皿	11.8	底径8.0	1.9	淡灰色	淡灰色	風化により不明	風化により不明	
27-2	SB02覆土	須恵器	皿	—	底径9.4	1.4	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
27-3	SB02覆土	須恵器	坏	12.8	底径8.0	4.5	淡灰色	淡灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	口縁端部油煙痕
27-4	SB02覆土	須恵器	坏	12.2	底径7.0	4.0	淡灰白	灰色	回転ナデ 静止ナデ	ナデ・回転ナデ 底部回転糸切り	外面・墨書文字、内面・油煙痕
27-5	SB02覆土	土師器	甕	20.8	…	6.5	褐色	褐色	ナデ・ケズリ ハケ目	ナデ	口縁部黒変
31-1	SB05・06覆土	須恵器	坏	—	—	2.3	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	
31-2	SB05・06覆土	須恵器	蓋	…	…	1.9	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
31-3	SB05・06覆土	須恵器	坏蓋部	—	底径8.8	1.3	灰色	灰色	回転ナデ	ナデ・回転ナデ 底部回転糸切り	
31-4	SB05・06覆土	須恵器	高台部	…	底径9.8	2.9	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ	
33-1	SD05	土師器	坏	—	底径5.3	1.3	褐内色	褐内色	風化により不明	風化により不明	
35-1	SB06	須恵器	施片	—	—	4.0	淡灰色	褐灰色	ナデ	ハケ目	
37-1	SB07	須恵器	皿	9.4	底径7.6	2.0	灰内色	灰内色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
38-1	SB08	須恵器	蓋	…	…	1.2	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
38-2	SB08	須恵器	坏	11.6	底径6.2	4.0	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 静止ナデ 底部回転糸切り	
42-1	SB09	須恵器	高坏脚部	…	—	1.2	淡黒色	淡黒色	回転ナデ	回転ナデ	
44-1	SB10	須恵器	高台付坏	—	底径10.5	2.9	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 静止ナデ	風化
48-1	SK03	須恵器	皿	—	底径7.4	1.7	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
50-1	SK05	須恵器	坏	14.8	底径10.8	3.9	淡灰色	淡灰色	風化により不明	風化により不明	
50-2	SK05	須恵器	皿	13.4	底径9.0	2.6	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 静止ナデ 底部回転糸切り	
50-3	SK05	須恵器	皿	14.1	底径9.8	3.2	淡灰色	淡灰色	風化により不明	風化により不明	
50-4	SK05	須恵器	坏	15.1	—	5.6	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	
50-5	SK05	須恵器	蓋	18.2	…	1.6	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	
50-6	SK05	須恵器	鉢指図	6.8	—	3.1	紫褐色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
50-7	SK05	土師器	把手	—	—	最大長6.9 最大高2.5	淡黄橙色	淡黄橙色	風化により不明	風化により不明	
52-1	SK07	磁器	碗	—	—	4.0			施釉	施釉	染付
54-1	SK08	須恵器	皿		底径6.4	1.6	淡灰色	淡灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
54-2	SK08	瓦	桟瓦	—	—	最大長13.3 最大高4.1	濃灰色	濃灰色	ナデ	ナデ	
54-3	SK08	陶器	擂鉢	27.8	…	8.3	茶褐色	茶褐色	施釉・櫛目	施釉	
54-4	SK08	陶器	蓋	37.0	…	6.4	茶褐色	茶褐色	施釉	施釉 回転ナデ	
56-1	SD04	須恵器	高台付坏			2.1	淡灰色	淡灰色	風化により不明	風化により不明	
56-2	SD04	土師器	高台付坏	—	—	2.6	橙色	橙色	ナデ	風化により不明	
58-1	NR01	須恵器	高台付坏	11.4	底径9.0	4.3	淡灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り 高台ナデ	
58-2	NR01	須恵器	坏	12.0	底径9.2	3.4	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
58-3	NR01	須恵器	皿	16.4	底径12.0	2.6	淡灰色 淡橙色	淡灰色 淡橙色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
58-4	NR01	須恵器	皿	12.2	底径8.4	2.1	淡灰色	淡灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
58-5	NR01	須恵器	蓋			残存高1.1	褐灰色	灰色	静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	輪状つまみ
58-6	NR01	須恵器	蓋	…	…	残存高2.3	淡褐灰色	淡褐灰色	静止ナデ	ナデ ヘラケズリ後 回転ナデ	宝珠つまみ
58-7	NR01	須恵器	鉢	19.4	…	6.1	灰色	灰色	回転ナデ ヘラケズリ 当て具痕	回転ナデ タタキ痕	

土　器

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	器種	法量(cm)			色調		調整		備考
				口径	底径・頸部径	器高(残高)	内面	外面	内面	外面	
58-8	NR01	土師器	甕	27.8	—	7.8	橙色	橙色	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	
58-9	NR01	陶器	口縁	—	—	1.9			施釉	施釉	陶胎染付
58-10	NR01	陶器	擂鉢?	—		2.8	褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	
58-11	NR01	陶器	火入	—	底径5.3	3.0	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ ケズリ	外面に釉
59-1	NR02	須恵器	坏	12.2	底径8.2	3.5	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
59-2	NR02	須恵器	坏	12.4	底径7.2	4.0	褐色	灰褐色	ナデ	ナデ 底部回転糸切り	
59-3	NR02	須恵器	高台付皿	19.4	底径11.0	4.0	灰橙色	灰橙色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
59-4	NR02	須恵器	蓋	14.8	—	2.7	黒灰色	黒灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	宝珠つまみ
59-5	NR02	土師器	甕	20.0	—	4.6	褐灰色	褐灰色	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	
59-6	NR02	土師器	甕	25.4	—	7.4	淡橙色	淡橙色	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	
60-1	NR03	須恵器	坏	12.0	底径8.7	3.9	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り 後ナデ	
60-2	NR03	須恵器	坏	12.6	底径8.5	4.5	赤褐色	黄褐色 底部赤褐色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
60-3	NR03	須恵器	坏	14.8	底径9.8	5.9	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
60-4	NR03	須恵器	高台付皿	16.6	底径12.2	3.8	灰色～ 暗灰色	灰色～ 暗灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
60-5	NR03	須恵器	盤(大皿)	20.8	底径17.4	3.4	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り の後ナデ	
60-6	NR03	須恵器	皿	16.4	底径11.5	2.5	淡黄灰色	淡黄灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り の後ナデ	
60-7	NR03	須恵器	坏底部	—	底径15.0	2.9	淡黄褐色	淡黄褐色	静止ナデ	回転ナデ 静止ナデ	
60-8	NR03	須恵器	蓋	13.6	—	2.9	淡黄褐色	淡黄褐色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	宝珠つまみ
60-9	NR03	土師器	土製支脚			5.8	黄橙色～ 淡黄褐色	黄橙色	指おさえ	ハケ目・ナデ	
60-10	NR03	土師器	甕	22.8	—	6.0	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヘラケズリ	ナデ	
60-11	NR03	土師器	甕	28.8	—	5.8	橙色	暗褐色	ナデ・ハケ目 ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	
60-12	NR03	土師器	甕	49.4	—	4.8	褐灰色	褐灰色	ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ目	
61-1	T-3 第13層	須恵器	坏	11.0	底径8.7	3.9	暗灰色	暗灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部静止糸切り	
61-2	T-3 第13層	須恵器	坏	22.0	—	6.2	淡灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	
61-3	T-3 第13層	須恵器	高台付皿	20.2	底径12.8	3.2	橙褐色～ 灰色	橙褐色～ 灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 底部回転糸切り	
61-4	T-3 第13層	土師器	甕	25.8	頸部径22.6	4.9	黄褐色	褐色	ナデ・ハケ目 ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	

土　製　品

挿図番号	出土層位・遺構面	器種	法量(cm)			重量(g)	色調	焼成
			最大長	最大幅				
61-5	T-2　第1層(耕作土)	土錘	3.6	2.0		10.59	暗灰色	

鉄　製　品

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
58-12	SR01	角釘	2.5	0.6	0.5	1.31	
61-6	T-1　第10層	鍬先	6.7	5.4	1.8	87.64	

石　製　品

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	法量(cm)			重量(g)	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
27-6	SB02覆土	砥石	25.9	10.6	2.3	660.11	凝灰岩	
27-7	SB02覆土	砥石	6.3	5.0	5.0	164.05	凝灰岩か泥岩	
59-7	崩落土	砥石	8.5	8.3	8.2	880.22	石英安山岩	

図　　版

上講武清水遺跡調査前全景（東から）

上講武清水遺跡調査後全景（西から）

図版２　上講武清水遺跡

東壁土層断面（北西から）

南壁土層断面（北東から）

SK01・02・03
完掘状況
（西から）

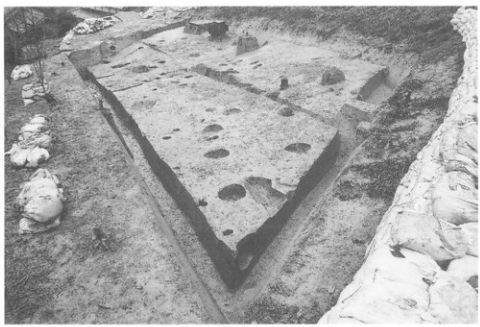
SK01完掘状況
（西から）

SK02完掘状況
（西から）

図版 4　上講武清水遺跡

SK03完掘状況
（南から）

SB01完掘状況
（南西から）



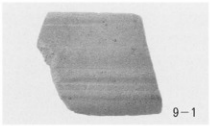
SD01・02、調査区
東側ピット完掘状況
（南東から）

第28層遺物出土状況

同　上

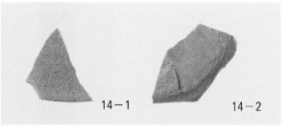
第30層遺物出土状況

図版6　上講武清水遺跡

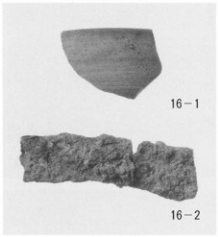


SK01出土遺物

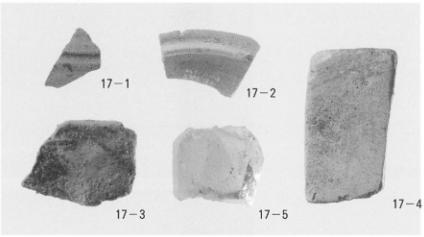
SK02出土遺物



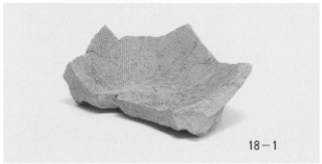
SB01出土遺物

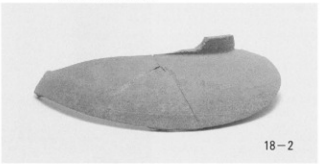


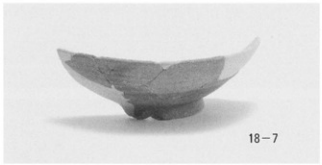
SD02出土遺物

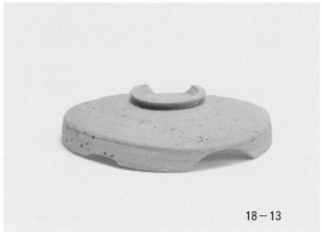


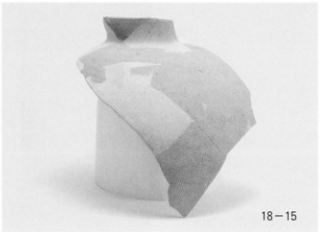
柱穴内出土遺物



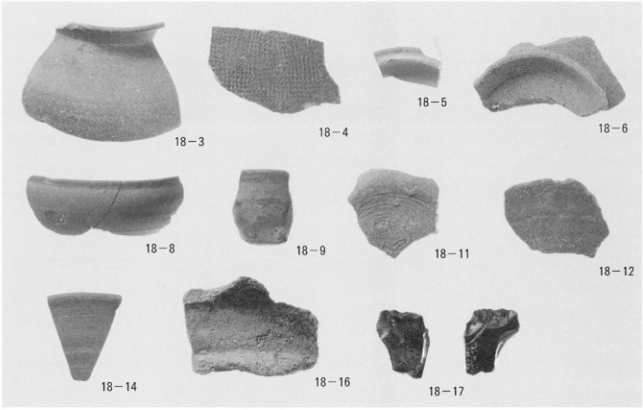




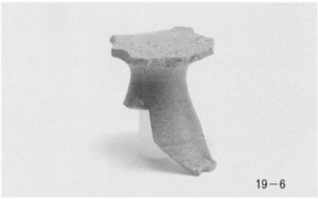




遺構外出土遺物


18－3
18－4
18－5
18－6
18－8
18－9
18－11
18－12
18－14
18－16
18－17

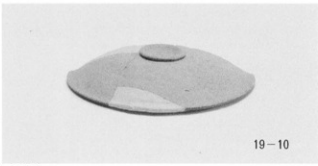
19－3


19－6

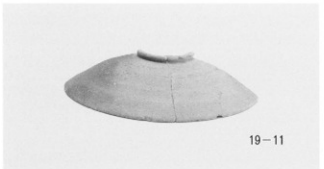
19－7

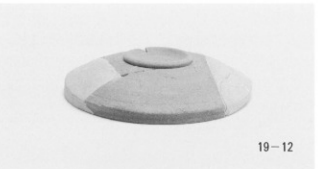
19－8

19－9

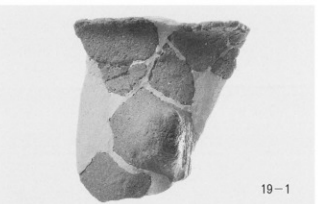

19－10

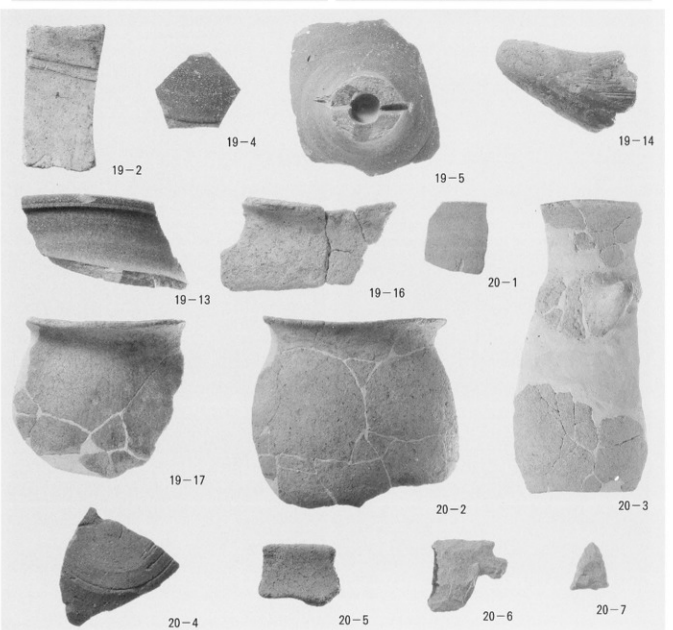
遺構外出土遺物


19－11


19－12

19－15


19－1

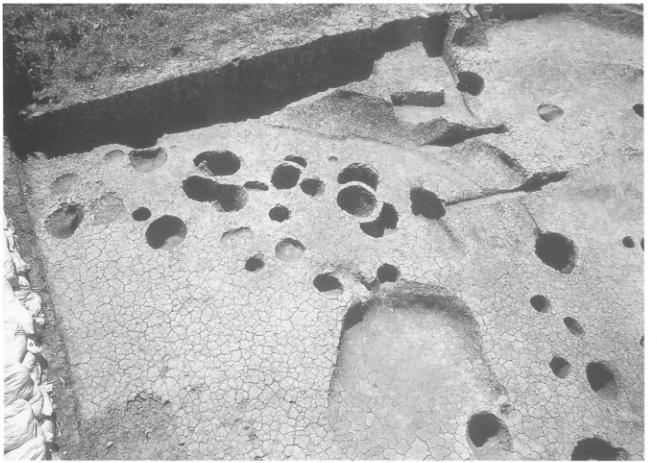

19－2
19－4
19－5
19－14
19－13
19－16
20－1
19－17
20－2
20－3
20－4
20－5
20－6
20－7

遺構外出土遺物

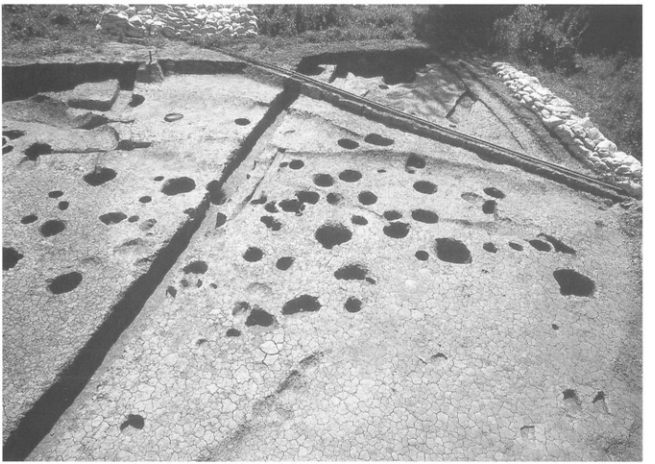
上講武大石遺跡調査前全景（北東から）

上講武大石遺跡調査後全景（北東から）

図版10　上講武大石遺跡

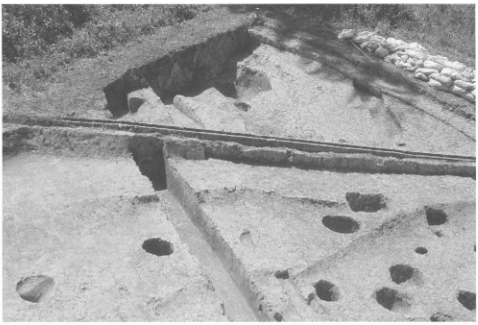


SB01・02全景（東から）



SB03・04・05・06・07・08全景（北東から）

SB09・10全景
（北東から）



SD01・02、SK01完掘
状況（東から）

SK02完掘状況
（東から）

図版12　上講武大石遺跡

SK03・SK04完掘状況
（南東から）

SK05完掘状況
（東から）

SK06・07完掘状況
（東から）

SK01礫出土状況
（南西から）

SK08完掘状況
（南東から）

SD03・04完掘状況
（南西から）

図版14　上講武大石遺跡

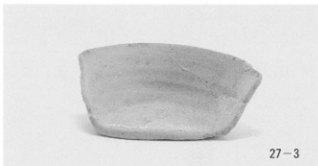
NR01・02土層断面
（南西から）

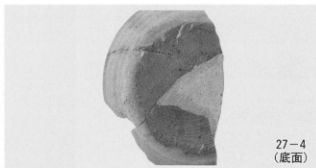
NR02完掘状況
（東から）

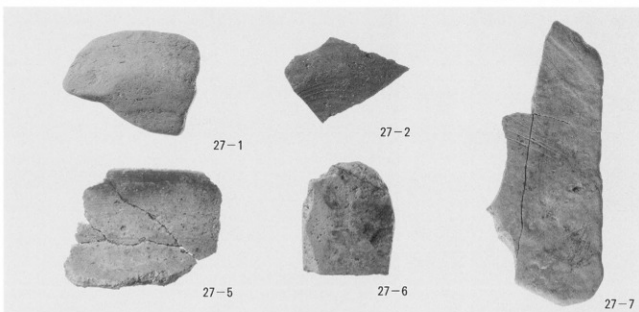
NR02遺物出土状況

27－3

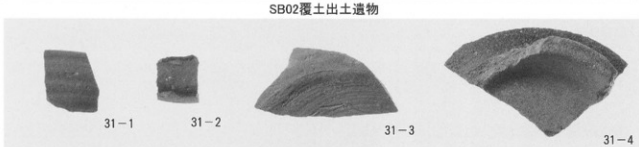
27－4


27－3

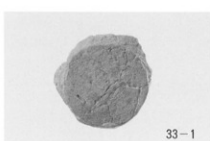

27－4
（底面）



SB02覆土出土遺物



SB05・06覆出土遺物


33－1

SB05出土遺物

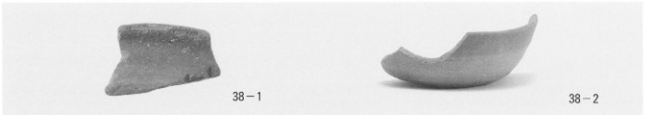
35－2

SB06出土遺物

36－1

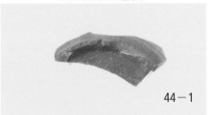
SB07出土遺物

図版16　上講武大石遺跡

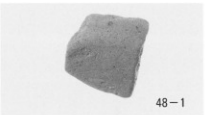


SB08出土遺物

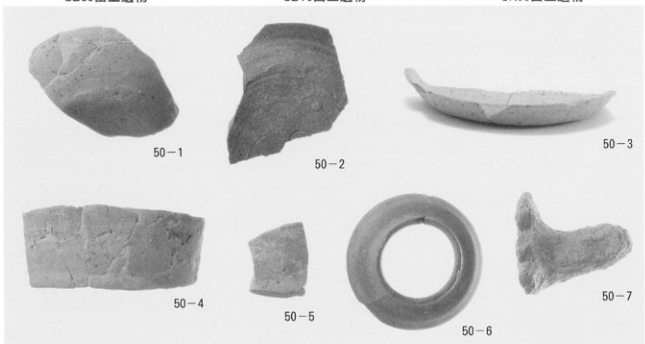
SB09出土遺物



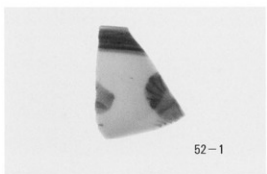
SB10出土遺物



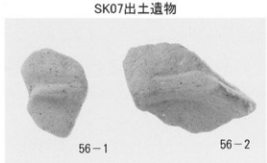
SK03出土遺物



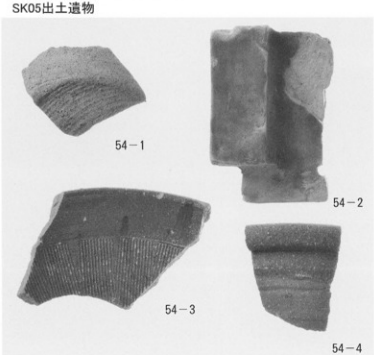
SK05出土遺物



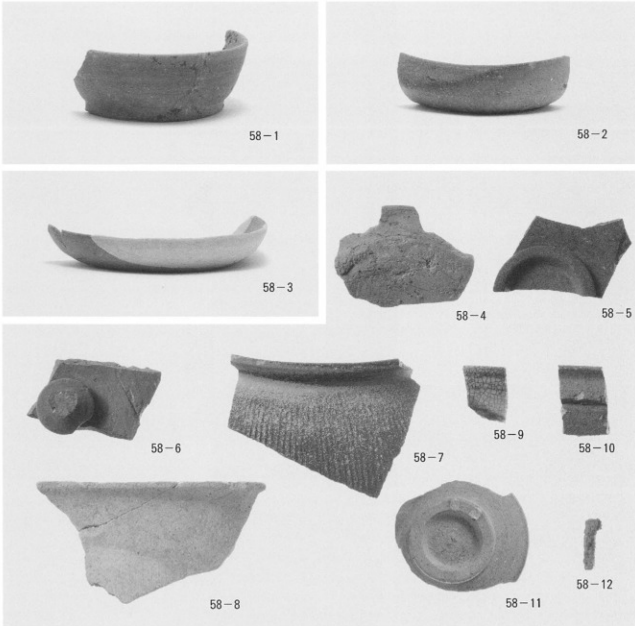
SK07出土遺物



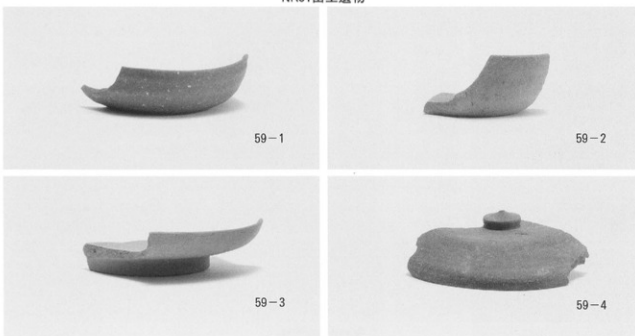
SD04出土遺物



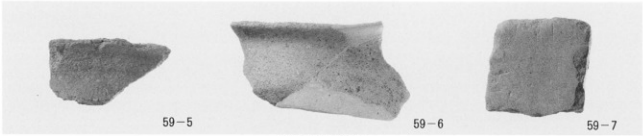
SK08出土遺物



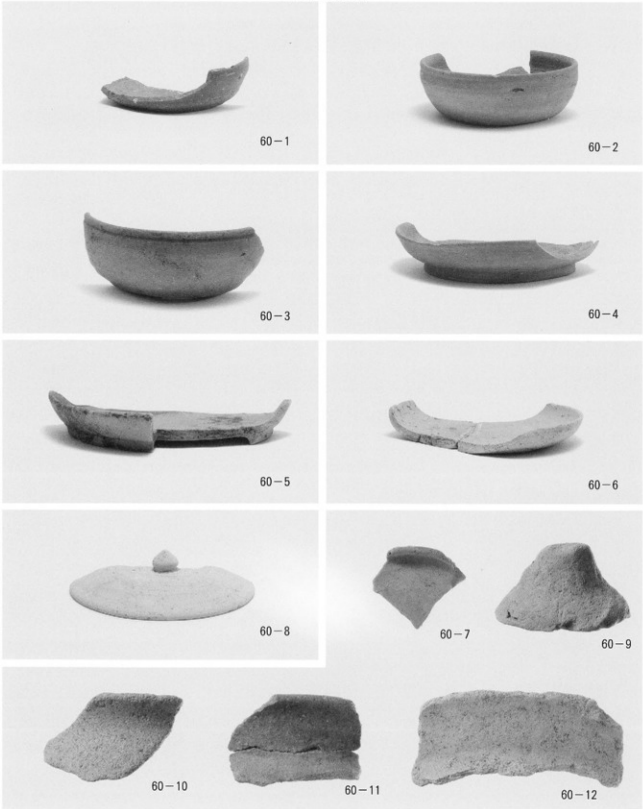
NR01出土遺物



NR02土出土遺物



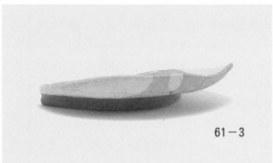
NR02出土遺物

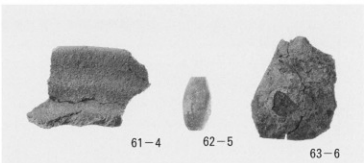


NR03出土遺物

61－1

61－2


61－3


61－4　62－5　63－6

遺構外出土遺物

T－3　第13層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみこうぶしみずいせき・おおいしいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上講武清水遺跡・上講武大石遺跡発掘調査報告書
副書名	市道大石清水線道路新設事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第137集
編著者名	廣濱　貴子
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	〒690-0826 島根県松江市学園南1-17-24　環境センター2F　TEL：0852-55-5284（文化財課） 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1　TEL：0852-85-9210（埋蔵文化財課）
発行年月	2011年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみこうぶしみずいせき 上講武清水遺跡	しまねけん 島根県 まつえし 松江市 かしまちょう 鹿島町	32201	K-108	35°52′88″ 133°04′40″	20091027 ～ 20100119	158㎡	市道大石清水線道路新設事業
かみこうぶおおいしいせき 上講武大石遺跡	しまねけん 島根県 まつえし 松江市 かしまちょう 鹿島町	32201	K-109	35°52′88″ 133°00′48″	20100413 ～ 20100727	539㎡	市道大石清水線道路新設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上講武清水遺跡	集落跡	古墳時代～奈良時代	掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構 柱穴	須恵器 土師器 石製品 鉄製品	掘立柱建物跡
上講武大石遺跡	集落跡	奈良時代～平安時代 近代以降	掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構 自然流路	須恵器 土師器 石製品 鉄製品 陶器	掘立柱建物跡 墨書土器

松江市文化財調査報告書　第137集
市道大石清水線道路新設事業に伴う発掘調査報告書
上講武清水遺跡・上講武大石遺跡
平成23年3月
発行　松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団
印刷　松栄印刷有限会社
島根県松江市西川津町667-1